

別記様式第2号（その1の1）

基本計画書

基本計画									
事項		記入欄						備考	
計画の区分		学部の学科の設置							
フリガナ設置者		ガッコウホウジン メイジガクイン 学校法人 明治学院							
フリガナ大学の名称		メイジガクインダイガク 明治学院大学 (Meiji Gakuin University)							
大学本部の位置		東京都港区白金台一丁目2番37号							
大学の目的		本学は、キリスト教主義教育を建学の精神とすると同時に、創設者へボンの生涯を貫く信念である“Do for others”を教育理念としている。本学のキリスト教主義教育は、教育理念を尊重する人格教育にあり、社会的弱者への共感という点で一貫している。すなわち、“Do for others”を実践する人材の育成を教育の目的にしている。							
新設学部等の目的		「ここを探り、人を支える」という心理学部の教育理念をさらに発展させ、心理支援・発達支援を教育の場面でも実践できる人材を養成し、卒業後の活躍の場を初等教育・幼児教育・特別支援教育の現場にも広げられるような職業資格の取得をサポートする。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	心理学部 [Faculty of Psychology] 教育発達学科 [Department of Education and Child Development] 計	4年	100人	-年次人	400人	学士 (教育発達学)	第1年次 平成22年4月 第1年次	東京都港区白金台一丁目2番37号 (3, 4年次) 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町1518番地 (1, 2年次)	
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)		平成22年4月 文学部英文学科〔定員減〕△60 (260名→200名) 平成22年4月 心理学部心理学科〔定員減〕△40 (200名→160名) 平成22年4月 経済学研究科経営学専攻博士前期課程〔定員減〕△30 (40名→10名)→ 平成22年4月 法務職研究科法務専攻〔定員減〕△20 (80名→60名)→(平成21年4月届出済)							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	心理学部 教育発達学科	講義	演習	実験・実習	計	1 0 5 科目 4 科目 1 2 科目 1 2 1 科目 1 2 4 単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
	新設分	心理学部 教育発達学科	教授	准教授	講師	助教	計	助手	
		計	11人 (10)	3人 (3)	0人 (0)	—人 (—)	14人 (13)	0人 (0)	37人 (15)
	既設分	文学部 英文学科	14 (14)	1 (1)	0 (0)	— (—)	15 (15)	0 (0)	85 (85)
		フランス文学科	8 (8)	4 (4)	2 (2)	— (—)	14 (14)	0 (0)	43 (43)
		芸術学科	9 (9)	3 (3)	0 (0)	— (—)	12 (12)	0 (0)	50 (50)
		心理学科	0 (0)	0 (0)	0 (0)	— (—)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
		教職課程	5 (5)	1 (1)	0 (0)	— (—)	6 (6)	0 (0)	21 (21)
		経済学部 経済学科	19 (19)	3 (3)	1 (1)	— (—)	23 (23)	0 (0)	20 (20)
		経営学科	6 (6)	4 (4)	1 (1)	— (—)	11 (11)	0 (0)	24 (24)
国際経営学科	8 (8)	0 (0)	2 (2)	— (—)	10 (10)	0 (0)	4 (4)		

平成16年4月より  
学生募集停止

教 員 組 織 の 概 要	既 設	社会学部 社会学科	15 (15)	2 (2)	2 (2)	－ (－)	19 (19)	0 (0)	27 (27)	平成17年4月より 学生募集停止
		社会学部 社会福祉学科	18 (18)	1 (1)	0 (0)	－ (－)	19 (19)	1 (1)	32 (32)	
		法学部 法律学科	12 (12)	5 (5)	3 (3)	－ (－)	20 (20)	0 (0)	51 (51)	
		政治学科	7 (7)	1 (1)	2 (2)	－ (－)	10 (10)	0 (0)	36 (36)	
		消費情報環境法学科	7 (7)	6 (6)	1 (1)	－ (－)	14 (14)	0 (0)	27 (27)	
		国際学部 国際学科	28 (28)	7 (7)	4 (4)	－ (－)	39 (39)	1 (1)	42 (42)	
		心理学部 心理学科	8 (8)	5 (5)	0 (0)	－ (－)	13 (13)	2 (2)	34 (34)	
		教養教育センター	13 (13)	8 (8)	11 (11)	－ (－)	32 (32)	0 (0)	386 (386)	
		文学部第二部 英文学科	0 (0)	0 (0)	0 (0)	－ (－)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
		経済学部第二部 経済学科	0 (0)	0 (0)	0 (0)	－ (－)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
		経営学科	0 (0)	0 (0)	0 (0)	－ (－)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
		法科大学院(法務職研究科)	16 (16)	1 (1)	0 (0)	－ (－)	17 (17)	2 (2)	60 (60)	
		計	193 (193)	52 (52)	29 (29)	－ (－)	274 (274)	6 (6)	942 (942)	
		合計	204 (203)	55 (55)	29 (29)	－ (－)	288 (287)	6 (6)	979 (964)	
		教員 以外 の 職員 の 概 要	職 種		専 任		兼 任		計	
事 務 職 員			153人 (153)		107人 (103)		260人 (256)			
技 術 職 員			3 (3)		0 (0)		3 (3)			
図 書 館 専 門 職 員			11 (11)		0 (0)		11 (11)			
そ の 他 の 職 員			0 (0)		0 (0)		0 (0)			
計			167 (167)		107 (103)		274 (270)			
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計		大学全体		
	校 舎 敷 地	205,199 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>		205,199 m <sup>2</sup>				
	運 動 場 用 地	72,112 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>		72,112 m <sup>2</sup>				
	小 計	277,311 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>		277,311 m <sup>2</sup>				
	そ の 他	1,057 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>		1,057 m <sup>2</sup>				
	合 計	278,368 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>		278,368 m <sup>2</sup>				
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計		大学全体		
		84,465 m <sup>2</sup> ( 84,049 m <sup>2</sup> )	0 m <sup>2</sup> ( 0 m <sup>2</sup> )	0 m <sup>2</sup> ( 0 m <sup>2</sup> )		84,465 m <sup>2</sup> ( 84,049 m <sup>2</sup> )				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設		大学全体			
	146 室	61 室	3 室	20 室 (補助職員 4人)	3 室 (補助職員 2人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称 心理学部教育発達学科		室 数 14 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用分 図書1,121,806冊 [408,602冊] 学術雑誌11,740種 [4,144種] 電子ジャーナル 22,853[22,853]種 視聴覚資料 15,441点		
	心理学部教育発達学	20,688 [2,774] (17,672 [2,376])	396 [270] (360 [256])	737 [737] (665 [665])	786 (721)	2036 (1677)	57 ( 35 )			
	計	20,688 [2,774] (17,672 [2,376])	396 [270] (360 [256])	737 [737] (665 [665])	786 (721)	2036 (1677)	57 ( 35 )			

図書館		面積		閲覧座席数			収 納 可 能 冊 数		大学全体	
		10,900 m <sup>2</sup>		1,148 席			1,221,000 冊			
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要						
		8,119 m <sup>2</sup>		弓道場			射撃場			
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経 費 の 見 積 り	区 分	開設前年度	第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次	図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費（運用コスト含む）を含む
		教員 1 人当り研究費等		450千円	450千円	450千円	450千円	—	—	
		共同研究費等		2,209千円	2,209千円	2,209千円	2,209千円	—	—	
		図 書 購 入 費	24,570千円	15,636千円	16,926千円	10,544千円	10,444千円	—	—	
	設 備 購 入 費	42,392千円	772千円	11,880千円	772千円	772千円	—	—		
	学生 1 人当り納付金	第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次			
		1,385千円	1,085千円	1,085千円	1,085千円	—千円	—千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、手数料収入、資産運用収入 等							

大学等の名称	明治学院大学							所在地				
	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度					
既設大学の等しい状況	文学部											
	英文学科	4	260 △60	—	1,040 △240	学士(英文学)	1.15	昭和24年	東京都港区 白金台一丁目 2番37号 (3,4年次)	H22年4月 定員変更		
	フランス文学科	4	120	—	480	学士(フランス文学)	1.15	昭和40年				
	芸術学科	4	125	—	500	学士(芸術学)	1.17	平成2年				
	心理学科	4	0	—	0	学士(心理学)	—	平成2年			H16年4月 募集停止	
	経済学部											
	経済学科	4	290	—	1,160	学士(経済学)	1.12	昭和24年			神奈川県横浜市 戸塚区上倉田町 1518番地 (1,2年次)	
	経営学科	4	180	—	720	学士(経営学)	1.13	昭和27年				
	国際経営学科	4	140	—	560	学士(国際経営学)	1.18	平成18年				
	社会学部											
	社会学科	4	230	—	920	学士(社会学)	1.12	昭和24年				
	社会福祉学科	4	240	—	960	学士(社会福祉学)	1.10	昭和40年				
	法学部											
	法律学科	4	280	—	1,120	学士(法学)	1.09	昭和41年				
	政治学科	4	120	—	480	学士(政治学)	1.09	平成2年				
	消費情報環境法学科	4	175	—	700	学士(法学)	1.11	平成12年				
	国際学部 国際学科	4	270	—	1,080	学士(国際学)	1.17	昭和61年	神奈川県横浜市 戸塚区上倉田町 1518番地			
	心理学部 心理学科	4	200 △40	—	800 △160	学士(心理学)	1.21	平成16年		H22年4月 定員変更		
	文学部第二部								東京都港区 白金台一丁目 2番37号	H17年4月 募集停止		
	英文学科	4	0	—	0	学士(英文学)	—	昭和24年				
経済学部第二部												
経済学科	4	0	—	0	学士(経済学)	—	昭和24年		H17年4月 募集停止			
経営学科	4	0	—	0	学士(経営学)	—	昭和27年		H17年4月 募集停止			
文学研究科								東京都港区 白金台一丁目 2番37号				
英文学専攻 (博士前期課程)	2	12	—	24	修士(英文学)	0.33	昭和30年					
英文学専攻 (博士後期課程)	3	2	—	6	博士(英文学)	0.83	昭和37年					
フランス文学専攻 (博士前期課程)	2	10	—	20	修士(フランス文学)	0.45	平成12年					
フランス文学専攻 (博士後期課程)	3	5	—	15	博士(フランス文学)	0.00	平成15年					
芸術学専攻 (博士前期課程)	2	10	—	20	修士(芸術学)	0.40	平成13年					
芸術学専攻 (博士後期課程)	3	5	—	15	博士(芸術学)	0.26	平成15年					

大学等の名称	明治学院大学								所在地	
	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度			
既設大学の等々の状況	経済学研究科 経済学専攻 (博士前期課程)	2	10	—	20	修士(経済学)	0.30	昭和35年	東京都港区 白金台一丁目 2番37号	H22年4月 定員変更
	経済学専攻 (博士後期課程)	3	3	—	9	博士(経済学)	0.11	平成元年		
	経営学専攻 (博士前期課程)	2	40 △30	—	80 △60	修士(経営学)	0.09	昭和45年		
	経営学専攻 (博士後期課程)	3	3	—	9	博士(経営学)	0.22	平成元年		
	社会学研究科 社会学専攻 (博士前期課程)	2	10	—	20	修士(社会学)	0.25	昭和42年		
	社会学専攻 (博士後期課程)	3	2	—	6	博士(社会学)	0.16	平成18年		
	社会福祉学専攻 (博士前期課程)	2	10	—	20	修士(社会福祉学)	0.65	昭和35年		
	社会福祉学専攻 (博士後期課程)	3	3	—	9	博士(社会福祉学)	0.77	平成18年		
	社会学・社会福祉学専攻 (博士後期課程)	3	0	—	0	博士(社会学) 博士(社会福祉学)	—	昭和44年		H18年4月 募集停止
	法学研究科 法学専攻 (博士後期課程)	3	5	—	15	博士(法学)	0.13	昭和47年		
	国際学研究科 国際学専攻 (博士前期課程)	2	10	—	20	修士(国際学)	0.35	平成2年		神奈川県横浜市 戸塚区上倉田町 1518番地
	国際学専攻 (博士後期課程)	3	3	—	9	博士(国際学)	0.11	平成4年		
	心理学研究科 心理学専攻 (博士前期課程)	2	30	—	60	修士(心理学)	0.86	平成16年		東京都港区 白金台一丁目 2番37号
	心理学専攻 (博士後期課程)	3	4	—	12	博士(心理学)	0.66	平成19年		
	法務職研究科 法務専攻 (専門職学位課程)	3	80 △20	—	240 △60	法務博士(専門職)	0.81	平成16年		
附属施設の概要	該当なし									

様式第2号（その2の1）

教育課程等の概要															
(心理学部教育発達学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
明治学院 共通科目	<キリスト教基本科目>														
	キリスト教の基礎A	1春	2			○								兼2	
	キリスト教の基礎B	1秋	2			○								兼2	
	<外国語基本科目>														
	英語コミュニケーション1A	1春	1			○								兼4	
	英語コミュニケーション1B	1秋	1			○								兼4	
	英語コミュニケーション2A	1春	1			○								兼4	
	英語コミュニケーション2B	1秋	1			○								兼4	
	フランス語1A	1春		1	*	○								兼1	
	フランス語1B	1秋		1		○								兼1	
	フランス語2A	1春		1		○								兼1	
	フランス語2B	1秋		1		○								兼1	
	中国語1A	1春		1		○								兼1	
	中国語1B	1秋		1		○								兼1	
	中国語2A	1春		1		○								兼1	
	中国語2B	1秋		1		○								兼1	
	ドイツ語1A	1春		1		○								兼1	
	ドイツ語1B	1秋		1		○								兼1	
	ドイツ語2A	1春		1		○								兼1	
	ドイツ語2B	1秋		1		○								兼1	
	スペイン語1A	1春		1		○								兼1	
	スペイン語1B	1秋		1		○								兼1	
	スペイン語2A	1春		1		○								兼1	
	スペイン語2B	1秋		1		○								兼1	
	韓国語1A	1春		1		○								兼1	
	韓国語1B	1秋		1		○								兼1	
	韓国語2A	1春		1		○								兼1	
	韓国語2B	1秋		1		○								兼1	
<情報処理基本科目>															
コンピュータリテラシー1	1春・秋		2	*	○								兼1	※実習	
コンピュータリテラシー2	1春・秋		2		○								兼1	※実習	
小計（28科目）		—	8	24	0	—	—	—	0	0	0	0	0	21	—
心理学部 共通科目	<基幹科目>														
	心理支援論1A	1春	2			○			1					兼3	オムニバス
	心理支援論1B	1秋	2			○								兼3	オムニバス
	心理支援論2A	2春	2			○			4						オムニバス
	心理支援論2B	2秋	2			○								兼4	オムニバス
	<心理学科目>														
	生涯発達心理学（乳幼児）	2秋	2			○			1						
	生涯発達心理学（児童）	3春	2			○			1						
生涯発達心理学（青年）	3秋	2			○								兼1		
生涯発達心理学（成人・老年）	4春	2			○								兼1		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
	健康心理学	4春		2		○									兼1	
	対人社会心理学	4春		2		○									兼1	
	小計 (10科目)	—	14	6	0	—	—	—	5	0	0	0	0	12	—	
学 科 目	<心理学科目>															
	教育発達学概論	1春	2			○			11	3					オムニバス	
	子どもの学習支援の心理学	1秋	2			○									兼1	
	子どもの行動理解の心理学	1春	2			○									兼1	
	子どもと家族支援の心理学	2春	2			○			1							
	教育心理学	2春	2			○			1							
	心理・教育研究法	1秋		2		○									兼1	
	心理・教育統計学	1春		2		○									兼1	
	<教育学(初等教育)科目>															
	教育原論	1秋	2			○										兼1
	教育課程編成論	1春		2		○										兼1
	幼児教育課程論	2春		2		○			1							
	教職概論	1春		2		○			1							
	教育の制度と経営	2春	2			○			1							
	教育社会学	3秋		2		○									兼1	
	教育方法論	2春	2			○			1							
	子ども文化	2秋		2		○			1							
	小学校英語活動	2春		2		○									兼1	
	日本国憲法	1春		2		○									兼1	
	体育理論	1春		2		○				1						
	国語	1秋	2			○			1							
	算数	1秋	2			○				1						
	社会	3春		2		○									兼1	
	理科	2春・秋		2		○									兼1	
	生活	2春・秋	2			○				1						
	音楽	2春・秋	2			○			1							
	家庭	2春・秋		2		○									兼1	
	図画工作	1春・秋	2			○			1							
	体育	2春・秋	2			○				1						
	音楽実技1	1秋	1					○	1						兼1	
	音楽実技2	2秋		1				○	1						兼1	
	音楽実技3	3春		1				○	1						兼1	
	<障害科学科目>															
	特別支援教育学総論A	2春	2			○			1							
	特別支援教育学総論B	2秋		2		○			1							
	知的障害の病理	3春	2			○			1							
	病弱の心理・生理・病理	3春		2		○			1							
	病弱教育総論	3春		2		○									兼1	
	肢体不自由の生理と病理	3秋		2		○			1							
肢体不自由者教育論	3春		2		○			1						集中		
<実習科目>																
体験活動方法論A	2春	1					○	1				2				
体験活動方法論B	2秋	1					○	1				2				
小計 (39科目)	—	—	35	38	0	—	—	—	11	3	0	0	2	12	—	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学 科 目	<心理学科目>														
	障害児・者心理学1 (コミュニケーション)	3春	2			○									兼1
	障害児・者心理学2 (行動)	3秋		2		○									兼1
	障害児・者心理学3 (学習)	3秋		2		○									兼1
	肢体不自由者の心理	3秋		2		○			1						
	学校心理学	4春		2		○			1						
	教育相談の理論と方法	3秋	2			○			1						
	幼児理解の理論と方法	4春		2		○			1						
	<教育学(初等教育)科目>														
	生徒・進路指導の理論と方法	3春	2			○									兼1
	国語科指導法	3春		2		○			1						
	算数科指導法	3秋		2		○				1					
	社会科指導法	3春		2		○									兼1
	理科指導法	2春		2		○									兼1
	家庭科指導法	2春		2		○									兼1
	音楽科指導法	3秋		2		○			1						
	図画工作科指導法	2春		2		○			1						
	体育科指導法	2秋		2		○				1					
	生活科指導法	2秋		2		○				1					
	道德教育の指導法	3春		2		○									兼1
	特別活動の指導法	3秋		2		○									兼1
	小学校英語研究	2秋		2		○									兼1
	子ども支援領域	保育内容の指導法	2秋		2		○								兼1
	保育内容(健康)	3春		2		○			1						
	保育内容(環境)	3秋		2		○			1						
	保育内容(人間関係)	3秋		2		○									兼1 集中
	保育内容(言葉)	3秋		2		○									兼1
	保育内容(音楽表現)	3春		2		○									兼1 ※実習
	保育内容(造形表現)	3秋		2		○									兼1 ※実習
	<障害科学科目>														
	障害児教育相談とアセスメント	3春	2			○			1						
	障害児教育学特講1(教育課程)	3春		2		○									兼1
	障害児教育学特講2(指導法)	3秋		2		○									兼1
	知的障害教育学総論	3秋		2		○			1						
	視覚障害教育総論	2春		2		○									兼1
	聴覚障害教育総論	3秋		2		○									兼1 集中
	<実習科目>														
	障害児基礎実習A	3春		2				○	1						
	障害児基礎実習B	3秋		2				○	1						
	障害児実習A	4春		2				○	1						
障害児実習B	4秋		2				○	1							
教育実習1	4通		5				○	4	2						
教育実習2	4通		3				○	2							
特別支援学校教育実習	4通		3				○	3							
<演習科目>															
教育発達学演習1	3通	2					○	11	3						
教育発達学演習2	4通	2					○	11	3						
教職実践演習(幼・小)	4秋		2				○	3	2						



科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
	<卒業研究> 卒業研究	4通		6			○		11	3					
	小計(44科目)	—	12	85	0	—			11	3	0	0	0	14	—
合計(121科目)		—	69	153	0	—			11	3	0	0	2	57	—
学位又は称号		学士(教育発達学)	学位又は学科の分野			文学関係、教育学・保育学関係									
卒業要件及び履修方法						授業期間等									
明治学院共通科目 必修 8単位、選択必修 6単位(キリスト教基本科目 4単位、外国語基本科目 8単位、情報処理基本科目 2単位を含む)。心理学部共通科目 必修14単位。学科科目・子ども理解領域 必修35単位、選択 8単位以上。学科科目・子ども支援領域 必修12単位、選択18単位以上。上記を含む124単位以上を取得すること。(履修科目の登録の上限:47単位(年間))						1学年の学期区分					2学期				
						1学期の授業期間					15週				
						1時限の授業時間					90分				

教育課程等の概要															
(心理学部教育発達学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
明治学院 共通科目	<キリスト教基本科目>														
	キリスト教の基礎A	1春	2			○								兼2	
	キリスト教の基礎B	1秋	2			○								兼2	
	<外国語基本科目>														
	英語コミュニケーション1A	1春	1			○								兼4	
	英語コミュニケーション1B	1秋	1			○								兼4	
	英語コミュニケーション2A	1春	1			○								兼4	
	英語コミュニケーション2B	1秋	1			○								兼4	
	フランス語1A	1春		1		○								兼1	
	フランス語1B	1秋		1		○								兼1	
	フランス語2A	1春		1		○								兼1	
	フランス語2B	1秋		1		○								兼1	
	中国語1A	1春		1		○								兼1	
	中国語1B	1秋		1		○								兼1	
	中国語2A	1春		1		○								兼1	
	中国語2B	1秋		1		○								兼1	
	ドイツ語1A	1春		1		○								兼1	
	ドイツ語1B	1秋		1		○								兼1	
	ドイツ語2A	1春		1		○								兼1	
	ドイツ語2B	1秋		1		○								兼1	
	スペイン語1A	1春		1		○								兼1	
	スペイン語1B	1秋		1		○								兼1	
	スペイン語2A	1春		1		○								兼1	
	スペイン語2B	1秋		1		○								兼1	
	韓国語1A	1春		1		○								兼1	
	韓国語1B	1秋		1		○								兼1	
	韓国語2A	1春		1		○								兼1	
	韓国語2B	1秋		1		○								兼1	
<情報処理基本科目>															
コンピュータリテラシー1	1春・秋		2		○									兼1 ※実習	
コンピュータリテラシー2	1春・秋		2		○									兼1 ※実習	
小計（28科目）		—	8	24	0	—			0	0	0	0	0	21	—
心理学部 共通科目	<基幹科目>														
	心理支援論1A	1春	2			○			1					兼3 オムニハス	
	心理支援論1B	1秋	2			○								兼3 オムニハス	
	心理支援論2A	2春	2			○			4					兼3 オムニハス	
	心理支援論2B	2秋	2			○								兼4 オムニハス	
	<心理学科目>														
生涯発達心理学（乳幼児）	2秋	2			○			1							
小計（5科目）		—	10	0	0	—		5	0	0	0	0	10	—	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
学科科目	子ども理解領域	<心理学科目>																
		教育発達学概論	1春	2						11	3						オムニバス	
		子どもの学習支援の心理学	1秋	2													兼1	
		子どもの行動理解の心理学	1春	2													兼1	
		子どもと家族支援の心理学	2春	2						1								
		教育心理学	2春	2						1								
		心理・教育研究法	1秋		2												兼1	
		心理・教育統計学	1春		2												兼1	
		<教育学(初等教育)科目>																
		教育原論	1秋	2														兼1
		教育課程編成論	1春		2													兼1
		幼児教育課程論	2春		2					1								
		教職概論	1春		2					1								
		教育の制度と経営	2春	2						1								
		教育方法論	2春	2						1								
		子ども文化	2秋		2					1								
		小学校英語活動	2春		2													兼1
		日本国憲法	1春		2													兼1
		体育理論	1春		2							1						
		国語	1秋	2						1								
		算数	1秋	2								1						
		理科	2春・秋		2													兼1
		生活	2春・秋	2								1						
		音楽	2春・秋	2						1								
		家庭	2春・秋		2													兼1
		図画工作	1春・秋	2						1								
		体育	2春・秋	2								1						
		音楽実技1	1秋	1						1								兼1
		音楽実技2	2秋		1					1								兼1
		<障害科学科目>																
		特別支援教育学総論A	2春	2						1								
特別支援教育学総論B	2秋		2					1										
<実習科目>																		
体験活動方法論A	2春	1											2					
体験活動方法論B	2秋	1											2					
小計 (31科目)		—	33	25	0			—	11	3	0	0	2	9	—			
学科科目	子ども支援領域	<心理学科目>																
		<教育学(初等教育)科目>																
		理科指導法	2春		2												兼1	
		家庭科指導法	2春		2												兼1	
		図画工作科指導法	2春		2					1								
		体育科指導法	2秋		2							1						
		生活科指導法	2秋		2							1						
		小学校英語研究	2秋		2												兼1	
保育内容の指導法	2秋		2												兼1			
<障害科学科目>																		
視覚障害教育総論	2春		2													兼1		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科科目 子ども支援領域	<実習科目>														
	<演習科目>														
	<卒業研究>														
	小計(8科目)	—	0	16	0	—			1	2	0	0	0	4	—
合計(72科目)		—	51	65	0	—			11	3	0	0	2	42	—
学位又は称号	学士(教育発達学)	学位又は学科の分野	文学関係、教育学・保育学関係												
卒業要件及び履修方法						授業期間等									
明治学院共通科目 必修 8単位、選択必修 6単位(キリスト教基本科目 4単位、外国語基本科目 8単位、情報処理基本科目 2単位を含む)。心理学部共通科目 必修14単位。学科科目・子ども理解領域 必修35単位、選択 8単位以上。学科科目・子ども支援領域 必修12単位、選択18単位以上。上記を含む124単位以上を取得すること。(履修科目の登録の上限:47単位(年間))						1学年の学期区分					2学期				
						1学期の授業期間					15週				
						1時限の授業時間					90分				

教育課程等の概要														
（心理学部教育発達学科）														
科目区分	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
明治学院共通科目	<初外教基本科目>													
	<外国語基本科目>													
	<情報処理基本科目>													
	小計（0科目）	—	0	0	0	—	—	—	0	0	0	0	0	0
心理学部共通科目	<基幹科目>													
	<心理学科目>													
	生涯発達心理学（児童）	3春	2			○			1					
	生涯発達心理学（青年）	3秋	2			○								兼1
	生涯発達心理学（成人・老年）	4春		2		○								兼1
	健康心理学	4春		2		○								兼1
	対人社会心理学	4春		2		○								兼1
	小計（5科目）	—	4	6	0	—	—	—	1	0	0	0	0	4
学科学目 子ども理解領域	<心理学科目>													
	<教育学(初等教育)科目>													
	教育社会学	3秋		2		○								兼1
	社会	3春		2		○								兼1
	音楽実技3	3春		1				○	1					兼1
	<障害科学科目>													
	知的障害の病理	3春	2			○			1					
	病弱の心理・生理・病理	3春		2		○			1					
	病弱教育総論	3春		2		○								兼1
	肢体不自由の生理と病理	3秋		2		○			1					
肢体不自由者教育論	3春		2		○			1						
	<実習科目>													
	小計（8科目）	—	2	13	0	—	—	—	11	3	0	0	0	4
学科学目 子ども支援領域	<心理学科目>													
	障害児・者心理学1（コミュニケーション）	3春	2			○								兼1
	障害児・者心理学2（行動）	3秋		2		○								兼1
	障害児・者心理学3（学習）	3秋		2		○								兼1
	肢体不自由者の心理	3秋		2		○			1					
	学校心理学	4春		2		○			1					
	教育相談の理論と方法	3秋	2			○		1						
	幼児理解の理論と方法	4春		2		○		1						

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手				
学 科 目  子 ど も 支 援 領 域	<教育学(初等教育)科目> 生徒・進路指導の理論と方法	3春	2			○										兼1	
	国語科指導法	3春		2		○			1								
	算数科指導法	3秋		2		○				1							
	社会科指導法	3春		2		○										兼1	
	音楽科指導法	3秋		2		○			1								
	道德教育の指導法	3春		2		○										兼1	
	特別活動の指導法	3秋		2		○										兼1	
	保育内容(健康)	3春		2		○			1								
	保育内容(環境)	3秋		2		○			1								
	保育内容(人間関係)	3秋		2		○										兼1	集中
	保育内容(言葉)	3秋		2		○										兼1	
	保育内容(音楽表現)	3春		2		○										兼1	※実習
	保育内容(造形表現)	3秋		2		○										兼1	※実習
	<障害科学科目> 障害児教育相談とアセスメント	3春	2				○			1							
	障害児教育学特講1(教育課程)	3春		2			○									兼1	
	障害児教育学特講2(指導法)	3秋		2			○									兼1	
	知的障害教育学総論	3秋		2			○			1							
	聴覚障害教育総論	3秋		2			○									兼1	集中
	<実習科目> 障害児基礎実習A	3春		2					○	1							
	障害児基礎実習B	3秋		2					○	1							
	障害児実習A	4春		2					○	1							
	障害児実習B	4秋		2					○	1							
	教育実習1	4通		5					○	4	2						
	教育実習2	4通		3					○	2							
	特別支援学校教育実習	4通		3					○	3							
	<演習科目> 教育発達学演習1	3通	2						○	11	3						
教育発達学演習2	4通	2						○	11	3							
教職実践演習(幼・小)	4秋	2						○	3	2							
<卒業研究> 卒業研究	4通		6					○	11	3							
小計(36科目)		—	12	69	0			—	11	3	0	0	0	0	10	—	
合計(49科目)		—	18	88	0			—	11	3	0	0	0	0	18	—	
学位又は称号	学士(教育発達学)	学位又は学科の分野	文学関係、教育学・保育学関係														
卒業要件及び履修方法						授業期間等											
明治学院共通科目 必修8単位、選択必修6単位(キリスト教基本科目4単位、外国語基本科目8単位、情報処理基本科目2単位を含む)。心理学部共通科目 必修14単位。学科科目・子ども理解領域 必修35単位、選択8単位以上。学科科目・子ども支援領域 必修12単位、選択18単位以上。上記を含む124単位以上を取得すること。(履修科目の登録の上限:47単位(年間))						1学年の学期区分			2学期								
						1学期の授業期間			15週								
						1時限の授業時間			90分								

<b>授 業 科 目 の 概 要</b>			
(心理学部教育発達学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
明 治 学 院 共 通 科 目	キリスト教の基礎A	キリスト教とは私にとって何か。否定的・肯定的を問わず、この問題に対して、受講者それぞれが自分の考えを説得的に表現できるようになることがこのコースの目標である。これはキリスト教が投げかける思想的課題に、現代に生きる私たちがどう応答するのかということでもある。 客観的な知識を憶えることよりも、まず「私はこう思う」という自分自身の考えを言葉で表現することを重視。授業は上記のテーマを中心に行うが、関心に応じて時間を多くとったり、テーマ自体を省略・変更することもある。毎回授業の最後にコメントシートを書いて提出してもらおう。また、テスト以外に2回の小レポートを予定している。	
	キリスト教の基礎B	キリスト教は2000年の歴史の中で、様々な矛盾・葛藤を通して多様な文化を生み出してきた。この文化形成のプロセスを追体験することが目的である。春学期受講していなくとも構わないが、基本的には「キリスト教の基礎A」の続きである。そのため、否定的・肯定的を問わず、キリスト教とは私にとって何か？という問いに対して、受講者それぞれが自分の考えを説得的に表現できるようになることを引き続きこのコースの目標としたい。この目標は決して簡単なことではないが、言葉にしにくいものを言葉にしていく作業こそが、新たな文化を生み出す原動力となるはずである。	
	英語コミュニケーション1A	英語によるコミュニケーションの必要性が叫ばれる一方で、軽視されがちな英語の音声面に焦点を当てる。英語の音を体系的に学びながら発音の仕方をトレーニングすることによって、カタカナ発音から脱皮し、英語らしい自然な発音を身につけると同時に、実際に英語を聞き話すことを通して英語によるコミュニケーションの方法を学ぶ。英語の読み書き能力を高めるための土台にもなるはずである。 英語コミュニケーション1Aは、ネイティブスピーカーによる授業で、さまざまなエクササイズを通して、実際に英語を使いながらリスニング・スピーキング能力を向上させる。予習をきちんとやることの他に、宿題としてテキストの内容にそったCDを活用した各種の課題をこなすことが求められる。	
	英語コミュニケーション1B	英語によるコミュニケーションの必要性が叫ばれる一方で、軽視されがちな英語の音声面に焦点を当てる。英語の音を体系的に学びながら発音の仕方をトレーニングすることによって、カタカナ発音から脱皮し、英語らしい自然な発音を身につけると同時に、実際に英語を聞き話すことを通して英語によるコミュニケーションの方法を学ぶ。英語の読み書き能力を高めるための土台にもなるはずである。 英語コミュニケーション1Bは、ネイティブスピーカーによる授業で、さまざまなエクササイズを通して、実際に英語を使いながらリスニング・スピーキング能力を向上させる。予習をきちんとやることの他に、宿題としてテキストの内容にそったCDを活用した各種の課題をこなすことが求められる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
明治学院 共通科目	英語コミュニケーション 2 A	<p>英語によるコミュニケーションの必要性が叫ばれる一方で、軽視されがちな英語の音声面に焦点を当てる。英語の音を体系的に学びながら発音の仕方をトレーニングすることによって、カタカナ発音から脱皮し、英語らしい自然な発音を身につけると同時に、実際に英語を聞き話すことを通して英語によるコミュニケーションの方法を学ぶ。英語の読み書き能力を高めるための土台にもなるはずである。</p> <p>英語コミュニケーション2Aの授業は日本人教員が担当し、日本語を使って行われる。日英の音・発音の違いを理解しながら、英語らしい発音の仕方と、自然なスピードで話される英語の聞き方を学ぶ。個々の音から単語、単語の組合せ、文と拡大しながら段階的にアクセント・リズム・イントネーションの使い方と聞き取り方を学び、最終的にはまとまった話の聞き取りを目標にする。加えて、語彙の増強を目差して語彙テストを随時行う。</p>	
	英語コミュニケーション 2 B	<p>英語によるコミュニケーションの必要性が叫ばれる一方で、軽視されがちな英語の音声面に焦点を当てる。英語の音を体系的に学びながら発音の仕方をトレーニングすることによって、カタカナ発音から脱皮し、英語らしい自然な発音を身につけると同時に、実際に英語を聞き話すことを通して英語によるコミュニケーションの方法を学ぶ。英語の読み書き能力を高めるための土台にもなるはずである。</p> <p>英語コミュニケーション2Bの授業は日本人教員が担当し、日本語を使って行われる。日英の音・発音の違いを理解しながら、英語らしい発音の仕方と、自然なスピードで話される英語の聞き方を学ぶ。個々の音から単語、単語の組合せ、文と拡大しながら段階的にアクセント・リズム・イントネーションの使い方と聞き取り方を学び、最終的にはまとまった話の聞き取りを目標にする。加えて、語彙の増強を目差して語彙テストを随時行う。</p>	
	フランス語 1 A	<p>初級フランス語を習得するために必要な文法事項を確実に身につける。</p> <p>初級フランス語の文法事項を、まず講師が簡単な例文をとりあげながら丁寧に説明する。次に練習問題を実際に解いてみる作業を通じて、学生が文法の知識を身につけることが要求される。</p>	
	フランス語 1 B	<p>初級フランス語を習得するために必要な文法事項を確実に身につける。</p> <p>初級フランス語の文法事項を、まず講師が簡単な例文をとりあげながら丁寧に説明する。次に練習問題を実際に解いてみる作業を通じて、学生が文法の知識を身につけることが要求される。</p>	
	フランス語 2 A	<p>平易なフランス語の文章の読解力を身につける。</p> <p>各課のフランス語のテキストを読むうえで必要な初級文法事項を、まず解説する。次に各課の平易なフランス語の文章を読み解く。最後にテキストの発音練習を行なう。</p>	
	フランス語 2 B	<p>平易なフランス語の文章の読解力を身につける。</p> <p>各課のフランス語のテキストを読むうえで必要な初級文法事項を、まず解説する。次に各課の平易なフランス語の文章を読み解く。最後にテキストの発音練習を行なう。</p>	
	中国語 1 A	<p>中国語の初習者を対象とし、中国語を読み、書き、聞き、話すための基礎力をつけることを目指す。「中国語 1 A・B」と「中国語 2 A・B」を同一年度に履修する。発音から始めて中国語の初級程度の語彙と文法を学ぶ。開始 3, 4 回の授業においては、発音の習得に集中して授業をすすめる。その後基本文法を少しずつ積み上げてゆく。</p>	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
明治学院共通科目	中国語 1 B	中国語の初習者を対象とし、中国語を読み、書き、聞き、話すための基礎力をつけることを目指す。「中国語 1 A・B」と「中国語 2 A・B」を同一年度に履修する。発音から始めて中国語の初級程度の語彙と文法を学ぶ。春学期に引き続き、テキストの後半部へ進む。引き続き発音習得にも注意を向けるが、文法項目習得に一層注意を向ける。	
	中国語 2 A	中国語の初習者を対象とし、中国語を読み、書き、聞き、話すための基礎力をつけることを目指す。「中国語 1 A・B」と「中国語 2 A・B」を同一年度に履修する。発音から始めて中国語の初級程度の語彙と文法を学ぶ。	
	中国語 2 B	中国語の初習者を対象とし、中国語を読み、書き、聞き、話すための基礎力をつけることを目指す。「中国語 1 A・B」と「中国語 2 A・B」を同一年度に履修する。発音から始めて中国語の初級程度の語彙と文法を学ぶ。	
	ドイツ語 1 A	読む、書く、聴く、話す能力の全体的向上を目指し、基礎的文法力を養成する。言語を通じて、ヨーロッパの中核にあり、日本との関わりも深いドイツ語圏の文化を学ぶ。基礎文法を詳しく学び、ドイツ語の構造を理解する。講師の説明のみならず、音読や練習問題にも取り組むことによって、各学習者の理解をより深める。1 Bと合わせて基本語彙を習得し、運用できるようになる。	
	ドイツ語 1 B	読む、書く、聴く、話す能力の全体的向上を目指し、基礎的文法力を養成する。言語を通じて、ヨーロッパの中核にあり、日本との関わりも深いドイツ語圏の文化を学ぶ。基礎文法を詳しく学び、ドイツ語の構造を理解する。講師の説明のみならず、音読や練習問題にも取り組むことによって、各学習者の理解をより深める。1 Aと合わせて基本語彙を習得し、運用できるようになる。	
	ドイツ語 2 A	読む、書く、聴く、話す能力の全体的向上を目指し、基礎的文法力を養成する。言語を通じて、ヨーロッパの中核にあり、日本との関わりも深いドイツ語圏の文化を学ぶ。基礎文法を含むテキストを用い、読解力、コミュニケーション能力を養成する。ドイツ語圏の文化や日常生活のさまざまな場面に題材を求めた、読解テキスト、聴き取り練習、会話練習等に取り組む。2 Bと合わせて基本語彙や表現を習得し、運用できるようになる。	
	ドイツ語 2 B	読む、書く、聴く、話す能力の全体的向上を目指し、基礎的文法力を養成する。言語を通じて、ヨーロッパの中核にあり、日本との関わりも深いドイツ語圏の文化を学ぶ。基礎文法を含むテキストを用い、読解力、コミュニケーション能力を養成する。ドイツ語圏の文化や日常生活のさまざまな場面に題材を求めた、読解テキスト、聴き取り練習、会話練習等に取り組む。2 Aと合わせて基本語彙や表現を習得し、運用できるようになる。	
スペイン語 1 A	世界約20ヶ国の公用語であるスペイン語を学び簡単なコミュニケーションができるようになることを目指すと同時に、スペイン語圏の社会・文化への関心と理解を深める。スペイン語で日常生活でのコミュニケーションができるようになるための基本的な文法および語彙を学習する。授業では、様々な活動を通じて言語の基本的な4技能の向上を目指す。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
明治学院 共通科目	スペイン語 1 B	世界約20ヶ国の公用語であるスペイン語を学び簡単なコミュニケーションができるようになることを目指すと同時に、スペイン語圏の社会・文化への関心と理解を深める。1Aで学んだ文法をより強固なものにすると同時に、基本的な文法および語彙の増強を図っていく。	
	スペイン語 2 A	世界約20ヶ国の公用語であるスペイン語を学び簡単なコミュニケーションができるようになることを目指すと同時に、スペイン語圏の社会・文化への関心と理解を深める。1Aで学ぶ基本的な文法・語彙をチェックした上で、それらを用いて身近な表現活動の練習をする。聴き取り、表現活動だけでなく簡単な内容の文章理解、また自分で文章を作るなどの活動も行っていく。	
	スペイン語 2 B	世界約20ヶ国の公用語であるスペイン語を学び簡単なコミュニケーションができるようになることを目指すと同時に、スペイン語圏の社会・文化への関心と理解を深める。1Bで学んだ文法・語彙をチェックすると同時に日常生活に必要な簡単なコミュニケーションが出来るようになるための練習を行っていく。聴き取り、表現活動だけでなく、簡単な文章の内容理解、また自分で文章を作るような活動も行う。	
	韓国語 1 A	韓国語の基礎を学ぶ。韓国語の文字と発音、語彙、文法の基礎を獲得する。発音の練習も重視し、簡単な表現であっても、初級の段階から実践的に表現しうる能力を養う。日本語を知るものこそが味わえる、日本語との対照言語学的な観点からの面白さも満喫したい。また韓国語をとりまく韓国の文化についても学ぶ。聞く、話す、読む、書くの4技能の総合的学習を通じ、コミュニケーション能力を養成する。 文字と発音の基礎に続き、基本的なあいさつ表現、基礎語彙、基本的な助詞、用言の活用の基礎を学び、自己紹介の表現をはじめ、実践的な表現を獲得する。待遇法のうち、丁寧な文体を学ぶ。「読む」、「書く」技能に中心を置く。	
	韓国語 1 B	春学期の学習をふまえ、韓国語の基礎を学ぶ。韓国語の文字と発音、語彙、文法の基礎を獲得する。発音の練習も重視し、初級の段階から実践的に表現しうる能力を養う。日本語を知るものこそが味わえる、日本語との対照言語学的な観点からの面白さも満喫したい。また韓国語をとりまく韓国の文化についても学ぶ。聞く、話す、読む、書くの4技能の総合的学習を通じ、コミュニケーション能力の増強を図る。 春学期に学習した基礎をうち固めながら、用言の活用の様々なタイプに習熟し、尊敬形や過去形、また用言の終止形に加えて、接続形などの諸形といった文法を学ぶ。加えて、基礎的な語彙力の拡充をはかり、実践的な表現力を養う。「読む」、「書く」技能に中心を置く。	
	韓国語 2 A	韓国語の基礎を学ぶ。韓国語の文字と発音、語彙、文法の基礎を獲得する。発音の練習も重視し、簡単な表現であっても、初級の段階から実践的に表現しうる能力を養う。日本語を知るものこそが味わえる、日本語との対照言語学的な観点からの面白さも満喫したい。また韓国語をとりまく韓国の文化についても学ぶ。聞く、話す、読む、書くの4技能の総合的学習を通じ、コミュニケーション能力を養成する。 文字と発音の基礎に続き、基本的なあいさつ表現、基礎語彙、基本的な助詞、用言の活用の基礎を学び、自己紹介の表現をはじめ、実践的な表現を獲得する。待遇法のうち、丁寧な文体を学ぶ。「聞く」、「話す」技能に中心を置く。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
明治学院 共通科目	韓国語 2 B	韓国語の基礎を学ぶ。韓国語の文字と発音、語彙、文法の基礎を獲得する。発音の練習も重視し、簡単な表現であっても、初級の段階から実践的に表現しうる能力を養う。日本語を知るものこそが味わえる、日本語との対照言語学的な観点からの面白さも満喫したい。また韓国語をとりまく韓国の文化についても学ぶ。聞く、話す、読む、書くの4技能の総合的学習を通じ、コミュニケーション能力の増強を図る。 前期で学習した基礎の上に、用言の活用の様々なタイプに習熟し、尊敬形や過去形、また用言の終止形に加えて、接続形などの諸形といった文法を学ぶ。加えて、基礎的な語彙力の拡充をはかり、実践的な表現力を養う。「聞く」、「話す」技能に中心を置く。	
	コンピュータリテラシー1	情報処理の基礎を理解し、コンピュータの基本操作法を習得する。基本的なコンピュータの操作法の修得を目的とする。情報処理とは、人間の知的活動そのものなので、コンピュータなしでも情報処理は可能であるが、コンピュータを利用するにあたっての約束事（データをどのように入力するか、データをどのように加工するか、結果をどのように表現するか）を簡単な例を用い、実際にパソコンを操作しながら学ぶ。	講義 20時間 実習 10時間
	コンピュータリテラシー2	アプリケーションプログラムの1つ、表計算の使用法の修得する。コンピュータ利用に関する初歩的な知識と技術を前提として、アプリケーションプログラムの1つである表計算の修得を目的とする。コンピュータを利用するにあたっての約束事（データをどのように入力するか、データをどのように加工するか、結果をどのように表現するか）を簡単な例を用い、実際にパソコンを操作しながら学ぶ。	講義 20時間 実習 10時間
心理学部 共通科目	心理支援論 1 A	(概要) 現代社会と心理学、人間の心の成り立ちと成長過程、人間の行動と対人関係、現代社会における心の問題、などのテーマを通して、心理学を学ぶことの意味、現代社会における心理学の役割を考える。  (オムニバス方式 / 全15回)  (5藤崎真知代 / 4回) 第1回目は、心理学部カリキュラムにおける心理支援論の位置づけと目的についての説明と、学生に求められる学習に対する姿勢と大学生のメンタルヘルスの問題について講義する。また、第2回目からは、人の発達についての基本的理解の上に、臨床発達心理学の立場から発達支援に関して論じ、発達を支援することを通して「心理支援」とはどのようなことかについて考える。 (26田村節子 / 3回) 学校で表面化する子どものさまざまな臨床的問題について、学校心理学の観点からの理解と援助法について学ぶ。 (27野末武義 / 3回) 家族心理学およびアサーション・トレーニングに関する基礎的な考え方と実践を学び、人の心や行動を家族関係やコミュニケーションの観点から理解する。 (20金沢吉展 / 3回) コミュニティ心理学と健康心理学をテーマとして取り上げ、この2分野の視点から心理支援について考える。治療的観点だけでなく予防的観点についても学ぶ。 (ゲストスピーカーによる講演 / 1回) 子どもの発達を支えるために、家族・学校・コミュニティが果たす役割とコラボレーションの展開について。 (全員 / 1回) まとめ	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
心理学部 共通科目	心理支援論 1 B	<p>(概要) 「心理支援」という言葉からは、臨床心理学や学校心理学といった分野が連想され易い。しかし、「心理支援」を実効性のあるものにするには、「心理支援」という言葉と結びつきにくい基礎的な分野についての理解も不可欠である。心理支援論 1 Bでは、生理心理学、認知心理学、社会心理学という「心理支援」からは遠いと思われがちな基礎的分野の教員 3 名が、それぞれの専門分野から、「心理支援」をいかにして実現するか、また「心理支援」を実効性のあるものにするかについて解説する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>(22花田安弘 / 5 回) 生理心理学と心理支援の関係について、同性愛、性同一性障害、記憶障害、自閉症、統合失調症、鬱病等と脳について論じることにより考察する。 (25岩男卓実 / 4 回) 学習支援の認知心理学というテーマについて、メタ認知と学習観、効率的に学習する技術、思考のバイアスについて講義する。また、認知心理学が意志決定支援に果たす役割について紹介する。 (28宮本聡介 / 4 回) 社会心理学領域における偏見・差別の心理メカニズム、コミュニケーションの心理過程、社会的スキル、葛藤とその解消について論じながら、コミュニケーション支援に果たす役割を講義する。 (全員 / 2 回) 体験授業とまとめ</p>	オムニバス方式
	心理支援論 2 A	<p>(概要) 障害があるということを医学的、心理学的、教育学的及び社会的視点から理解し、障害のある人への心の健康支援、学習支援、生活支援、保護者支援などについて、特別支援教育の動向に触れながら、支援の現状と課題を講義する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>(2金子健 / 4 回) 特別支援教育の制度と歴史、世界の動向、現状と課題について講義する。 (3小林潤一郎 / 4 回) 医学の分野から「障害」について解説し、さらに、広汎性発達障害の発見の経路や発達障害の子どもの心の健康支援に焦点を当てて講義する。 (1緒方明子 / 3 回) 障害児者心理学で対象としている研究領域について紹介し、学習面の困難さをもつ子どもへの支援、行動面の困難さをもつ子どもへの支援の内容・方法について講義する。 (4清水良三 / 4 回) 障害児者への支援に関して、臨床心理学の領域からの視点で解説する。特に、心理職の役割と機能、家族療法、障害児者のより良い生き方への支援を中心に講義する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
心理学部 共通科目	心理支援論 2 B	<p>(概要) 「臨床心理学的心理支援」について、主として「関係理解」という側面から講義する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(21杉山恵理子 / 4回) 臨床心理学の原理と技法について、さまざまな場における心理支援、特に精神障害者に対する心理支援、グループアプローチと心理支援について研究・実践の両面から学ぶ。</p> <p>(24市川珠理 / 3回) 臨床心理学における心理アセスメントの方法と実際、研究を通して心理支援について学ぶ。特に描画法について学ぶ。</p> <p>(15阿部裕 / 3回) 心理学と医学、さらには臨床心理学と精神医学の相違点を明確にした上で、精神医学視点からこころのあり方と、その支援を探る。</p> <p>(17井上孝代 / 3回) カウンセリング心理学の立場から、「自己理解」「他者理解」「相互理解」という3つのプロセスをたどりながら、「共感的対話」の重要性を切り口として、心理支援力の育て方について学ぶ。</p> <p>(全員 / 2回) 2年間の心理支援論の総括として、「心理支援論とは」という内容の講義、ディスカッションを行い、授業内レポート作成を行う。</p>	オムニバス方式
	生涯発達心理学 (乳幼児)	生涯発達における乳幼児期の重要性を論じた上で、家庭生活から近隣社会への生活空間の広がりに伴い、親子の愛着形成からきょうだい関係、集団保育における保育者との関係から仲間関係を通して、認知的側面、社会・情動的側面、および自己認識の側面に関する発達の様相について概説する。また、今日の少子化・情報化・高齢化社会における乳幼児期の発達を保障するための乳幼児保育や子育て支援のあり方、父親の育児参加等の現代的な課題についても言及し、現代社会において子どもの置かれている状況と幼児保育・教育との接点について理解を深める。	
	生涯発達心理学 (児童)	生涯発達における児童期の発達の意義を論じた上で、就学前後の接続期、さらに小学校中学年・高学年における家庭生活、学校生活、および放課後の生活を通して、認知的側面、社会・情動的側面、および自己認識に関する発達の様相について概説する。特に学校教育が児童の発達に及ぼす影響として肯定的自己感を支えるための教育評価のあり方、教師・友だち関係のあり方、食育のあり方、さらには地域との連携のあり方について論じた上で、学校生活におけるつまずきとその対応についても言及し、児童期における発達と学校教育との関わりについて理解を深める。	
	生涯発達心理学 (青年)	生涯発達の視点から、児童期後期から思春期・青年期までの心身と発達の特徴および発達プロセス、発達メカニズムについて理解し、生涯発達の視点に立った支援のあり方について探求・省察し、思春期・青年期の心理的特徴と行動を理解し、中学校、高等学校、及び地域における生徒・保護者に対する支援の意義について理解することを目的とする。すなわち、小学校高学年から中学校への移行、中学校から高校への環境移行、自己および自己概念の確立とアイデンティティ形成の問題、家族や友人関係、近隣社会や社会的適応の問題、思春期・青年期の認知発達、成熟と性役割の獲得との関係などの理解に基づき、思春期・青年期の生徒への支援、保護者支援・地域支援のあり方などを知る。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
心理学部 共通科目	生涯発達心理学（成人・老年）	生涯発達心理学の視点に立ち、成人期から老年期までの発達の变化、及び発達の变化に関わる個体と環境との相互作用についての基礎的知見を概説する。具体的には、家族システムとしての中年期・老年期の課題、高齢化の国際比較、感覚器官の老化による知覚の加齢変化と障害、認知・知能・感情・性格と加齢、認知症、及びそれらの変化要因について解説した上で、成人・老年の人々や地域の人々に対してどのような支援ができるかを論じる。	
	健康心理学	健康心理学は、健康の維持・増進、疾病の予防・治療、疾病・健康に関する原因・診断の究明、およびヘルスケアシステムの分析と改善に関わる分野である。心理学領域でありながら、主として身体的な疾病や健康を中心としている。この健康心理学について、概略を論じることをねらいとする。 健康心理学の主な内容について、以下の観点から説明する。必要に応じてビデオ視聴も用いる。 1. 健康心理学の定義と歴史的背景、関連諸領域 2. ストレスとコーピング 3. 疾病に関する心理学的援助（HIV/AIDS、がん、心臓血管系疾患、慢性痛） 4. 疾病・健康の心理学的・行動的側面 5. ヘルスプロモーション	
	対人社会心理学	社会心理学は集団過程を扱う心理学と、個人過程を扱う心理学の2分野に大別することが可能である。本講では後者の個人過程に焦点を当て、そこに現れるさまざまな心理現象とそれを説明する理論・モデルを、社会的認知(Social Cognition)の立場から詳細に解説する。対人認知、自己認知、ステレオタイプ、自動性と統制性、意識・無意識などが本講を理解するキーワードとなる。脳科学による最新の知見も折に触れて紹介する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども理解領域 学科科目	教育発達学概論	<p>(概要) 生涯発達心理学、教育学、障害科学の各領域に共通する現代的なトピックについて紹介し、教育発達学が現代社会においてどのように貢献し得るのかを論じる。 (オムニバス方式 / 全15回) (2金子健/2回) 教育発達学概論の学修目標と授業の進め方、カリキュラムにおける教育発達学概論の位置付けについて解説し、課題を浮き彫りにしていく。また、幼児児童の発達における教育の役割および特別なニーズに対する支援について概観する。 (5藤崎真知代/1回) 家庭生活と教育発達：家庭教育と学校教育との違い、今日における家庭と学校との関連について概説し、家庭生活を通じた教育発達について論じる。 (4清水良三/1回) 地域生活と教育発達：都市部と周辺部、振興住宅地と伝統的生活地では、人口構成も異なり、子どもたちの地域生活環境は大きく異なる。地域における教育力の質と量の影響について論じる。 (14長谷川康男/1回) 学校生活の中で経験した事柄が、児童生徒の発達にどのように影響するのかを概説する。また、生涯発達における学校生活の意義について講義する。 (1緒方明子/1回) 地域の社会教育機関等で提供している放課後の活動を紹介します、それらが果たしている役割について講義する。 (12辻宏子/1回) 教育発達学における「算数」という教科の位置づけを紹介し、子どもの発達と算数の学びについて講義する。 (7岩辺泰史/1回) 教育発達学における「国語」という教科の位置づけを紹介し、子どもの発達と読書の関係を中心に講義する。 (10水戸博道/1回) 教育発達学における「音楽」という教科の位置づけを紹介し、生涯発達と音楽の学びについて講義する。 (13出井雄二/1回) 教育発達学における「体育」という教科の位置づけを紹介し、子どもの発達と様々な運動動作との関係について講義する。 (6新井哲夫/1回) 教育発達学における「図画工作」という教科の位置づけを紹介し、子どもの発達と図工の学びについて講義する。 (9松村茂治/1回) 不登校やいじめ等、学校生活の中で生じる様々な問題に対して教育発達学がどのようにアプローチできるのかを講義する。 (3小林潤一郎/1回) 発達障害のある子どもの心の健康支援について、学校における早期発見・早期対応、予防的介入の方法、学校教育との関係、課題等を講義する。 (11湯川秀樹/1回) 幼稚園から小学校への移行の時期に生じる課題に対して、教育発達学が果たすべき役割について講義する。 (8下田好行/1回) 小学校から中学校への移行の時期に生じる課題に対して、教育発達学が果たすべき役割について講義する。</p>	オムニバス方式
	子どもの学習支援の心理学	乳幼児期から児童期の子どもの各発達段階における知覚・認知能力と思考特性、記憶のメカニズムとを把握し、子どもは何をどのように認知し、記憶し、どのような思考メカニズムを持って何を、どのように、学習するのか。その心理学的な基本的メカニズムの理論的理解を深め、教育発達学科の基幹科目である心理支援に基づき、子どもが、主体的・自律的に学習することの具体的な支援の方法を考える。同時に学生自らの認知・学習スタイルを振り返ることにより、学生自身の学習支援・心理的発達の助けとする。	
	子どもの行動理解の心理学	教育とりわけ子どもの教育を進めるにあたっては、子どもの行動のメカニズムを理解する必要がある。子どもがどのような欲求や感情を持ち、それらをどのように調整しつつ行動するのかについて学び、さらに子どもの行動に先立って起こる動機づけ（感情・欲求を含む行動生起のプロセス）のメカニズムについて知る必要がある。乳幼児期から児童期の子どもの欲求や感情、動機づけのメカニズムや発達の諸相について学ぶことにより、その行動の発達の、心理学的理解を深めることができ、子どもの行動に適切に対応する力を身につけるようにする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども理解領域	子どもと家族支援の心理学	学校で支援を必要としている子どもの状態を把握して、支援を実行していくために必要な知識を学ぶ。実態把握のための観察の観点や子どもの作品からつまづきを把握する方法について講義する。教科学習や対人関係で困難を抱えている状態と二次障害について実態を紹介し、具体的な支援の方法についても講義する。また、学校での困難さの背景として家族の問題がある事例について紹介し、保護者やきょうだいの心理と家族支援の方法について学んでいく。	
	教育心理学	教育心理学は、子どもの発達と学習に関するさまざまな領域を取り扱う。発達、学習、教育評価、学級集団、適応等の領域と研究方法等について概観した後、各領域について詳述していく。教育的はたらきかけを様々な側面から考えることにより、学校教育における教育心理学の意義について解説する。特に、学級集団の特徴やそれを理解するための方法、教師と子どもとの関係作り、学校不適応に関する問題、障害のある児童生徒への対応に重点をおいて講義する。	
	心理・教育研究法	教育発達学の対象には、子どもをはじめとし、教師、保護者、学校社会、地域社会等の広い範囲におけるさまざまな教育事象や、心理事象、社会事象が含まれる。心理事象や教育事象、社会事象を科学的に理解し、事実を把握し、実証的に検証していくという研究的態度が具現する実験法や調査法、そして観察法などの主要な研究方法について、基本的な知識を獲得するとともに、基礎的な心理実験や、行動観察、心理教育調査などを体験的に行うことを通して、具体的な研究法を学修する。	
	心理・教育統計学	教育に関する心理学実験や教育調査・社会調査、授業や教授法の効果等の教育活動の評価など、心理事象や教育事象を客観的、科学的に理解するための統計および実験計画の基礎知識を得ること、データの種類と適切な統計法の選び方を学ぶことを目標とする。表計算ソフトや統計ソフトを用いてデータの整理・分析の実習を行う。目的に沿って、適切なデータを収集し、適切な分析方法を選ぶことができるよう、様々な数値データを用いて実際に分析を行う。	講義 20時間 実習 10時間
	教育原論	教育に関する基本的な概念や理論、歴史についての知識を習得し、我が国の学校教育、中でも初等教育の内容、方法論の基礎を理解し、初等教育に携わる者としての土台を築くものとする。とりわけ、昭和33年以来、学校教育の拠り所とされてきた系統主義の教育原理の特徴を、経験主義の教育原理による教育実践と比較しつつ解説し、さらに学生自身の学校教育体験を踏まえて、現在のさまざまな教育問題や学力問題等の課題について検討する。	
	教育課程編成論	学校教育は、憲法や教育基本法を踏まえ、かつ地域・児童の実態を踏まえて編成される教育課程とその基準としての学習指導要領に基づいて行われる。教育課程は、児童生徒の人間としての調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童生徒の心身の発達段階や特性等を十分に考慮して各学校において適切に編成するものであることなど、初等教育における教育課程についての基礎知識を習得し、初等教育目標や内容についての理解を深める。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども理解領域 学科科目	幼児教育課程論	幼稚園における教育課程が入園から修了までの保育の全体計画であり、その編成が保育の質にかかわる重要な課題であることを踏まえつつ、幼児期の発達的特質と教育の特質、保育内容の変遷と教育課程の意義、教育課程編成の基準等、幼児期の教育と教育課程についての基本的な理念を論じる。また、具体的な教育課程の編成、指導計画の作成から実践、教育課程の評価・改善に至るまでの教育課程編成の実際について概述するとともに、教育課程の創意ある編成のために、特色ある幼稚園づくりと教育課程の編成、カリキュラム開発等についてもふれる。	
	教職概論	教師とは何か、教師の職務内容、学校組織と教師、教育公務員としての教師、教師としての職能成長などについて学ぶ。教師の仕事内容として、学習指導、学級経営、生活指導、PTA、校務分掌、クラブ・部活動、学校行事などについて学ぶ。また、教師の研修・サービス・身分保障等についても理解を深める。教師としての第一歩は子どもとの出会いから始まる。児童館・学童保育を訪問し、子どもとふれあう体験を行う。このことを通して自己のありようと教師、職業としての教師と自己の生き方との関係を振り返る学習を行う。	
	教育の制度と経営	現代の公教育制度、教育法制、行財政、学校経営と評価、児童・生徒の管理、社会教育等、日本の教育制度と経営に関する基礎的な事項について概述する。また、文部行政の実務経験を踏まえて、教育改革や文部行政、教育課程の動向と課題、幼稚園や小学校をめぐるさまざまな問題、そうした問題に対応すべく教員養成や研修制度の課題等について具体的に検討し、今日の初等学校教員として必要とされる実務的・実践的能力を培う。	
	教育社会学	教育社会学は、教育事象にかかわる社会制度や人々の価値観などの文化的、社会的要因を踏まえて、教育という活動とその課題を取り扱う。そのために、教育にかかわる社会政策や制度、社会心理学的理解といったマクロな視点と、個人の日常的社会生活や行動特性、パーソナリティといったミクロな視点を統合的に把握しつつ、社会現象としての教育事象を把握する力を身につけるようにする。学生自身の教育体験を踏まえて、教育に関わる社会事象を把握し、理解する力をつける。	
	教育方法論	教育の方法と技術（情報機器及び教材の活用を含む）に関する基礎的事項を講義する。特に学習指導の理論とスキルを修得することを目的とする。単元計画・学習指導案の書き方、発問・指示と板書の工夫、教材開発の方法など、学習指導の基礎について学習する。学生は6～8人のグループを作り、それぞれ教材開発を行い、模擬授業を行う。教科は国語、道徳、特別活動、総合的な学習を中心に行う。模擬授業後、学生はグループメンバーからコメントを受け、自らの授業を振り返る。	
	子ども文化	子どもが生活するマクロとミクロな環境において、言葉や行動を用いての自己表現や他者との人間関係を含め、子どもをめぐり文化環境について、現状を把握し、課題を抽出する。また、絵本や児童書の講読を通じて子どもの世界に何が起きているのかを知る。さらに、子どもが絵本や児童書に触れることによって感じていく学びの喜びを学生が体験できるように、ワークショップ形式の活動を授業に取り入れる。これらの活動を通じて、子どもをめぐり現代的な課題を明らかにする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども理解領域	小学校英語活動	初等教育において、外国語に関する活動を行うことは、言葉と表現を通して、国語に対する理解を深めることでもある。外国語を通じて外国の言語や文化に対する理解を深めるとともに、我が国の言語と文化の対比を通じて、それぞれの国のもつ言語や文化特性を理解し尊重する心と態度を育て、もって国や人種に関らず積極的に人とかわらうとするコミュニケーション能力の基礎を培う。そのために英語を聞き、英語で話し、英語を読み、英語で書くという基礎的な英語活動を通じて基本的な英語に慣れ親しむことができるように講義する。	
	日本国憲法	この講義は日本国憲法の基本原理と、条文の解釈上問題となる基本的な重要判例について検討し、もって日本国憲法の概要を理解することを目的とする。第1には日本国憲法を支える立憲主義について、第2には人権保障に関する憲法の人権規定について、裁判の場面で問題となった憲法判例を題材にして人権保障の意味を考える視点を提供する。さらに、人権保障を実効的なものにするための統治機構について解説する。また憲法の改正について基本的な法的知識を解説し、有権者としての基本的視点を提供する。	
	体育理論	われわれの身近に存在している体育・スポーツに生起している諸問題について直視し、体育・スポーツの世界を支配する諸原理を明確にし、それらを体系立て、批判的に検討していく。授業はテキストを中心にした体育原理に関する内容についてディスカッション形式で進めていく。この授業を通して、体育原理という学問について理解し、体育・スポーツに関する諸問題について批判的に検討することができることを目的とする。主な内容は、体育とスポーツの違い、体育とフェアプレイ、子どもから見た体育、等で構成される。	
	国語	読み、書き、話し、表現するという国語の力は、学力の基礎であるとともに人と人を結び、世界を認識し、人として育つ基本の力である。ここでは、小学校国語科の目標・内容、その基本的指導事項がどのように決められているのかを学習する。そして、学ぶ側の子どもの視点に立ち、何をどのように組み立てていくことがこの社会を生きていく子どもたちを励ます豊かな国語教育となるのかを考えていきたい。国語科教科書や児童の作品等を活用して授業を進めていく。	
	算数	小学校算数科は4つの領域によって構成されている。その4つの領域について、算数科の学習内容を数学的な面から分析し、理解することを目的とする。特に、A「数と計算」、C「図形」に重点を置き、数の意味、整数から、小数・分数、それ以降への発展、計算の意味と方法などについて適切に分析できる力を養うことを目的とする。図形概念の特徴が適切に説明できるとともに、図形を探究するための方法として作図や証明の意義が理解できるように講義を進める。	
	社会	社会科教育の理論と実践について、教師として基礎的な知識と技能を身に付ける。まず、社会科教育の目標や内容について、戦後の学習指導要領の変遷を軸にして理解を深めるとともに、社会科教育の意義や果たす役割を多面的・多角的に考察する。また、社会科の学習領域のうち、特に地理学習の指導スキルの向上を目指し、様々な地図や景観写真等を読み取る技能、日本や世界の諸地域の特色を考察する方法などについて学ぶ。その際、言語活動の充実の観点から、教材開発や指導上のポイントなどについても論じる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども理解領域 学科科目	理科	理科嫌い、理科離れがすすんでいるといわれる我が国において初等教育における効果的な理科教育は重要である。子どもが自らをとりまく自然の事物や自然現象に自発的に関心を持ち、観察し、実験的なかかわりを行って科学的に事実を探究する能力の基礎を育てることが必要である。そのためには、児童期という発達段階にある学習者の興味・関心・既習知識・生活経験などの発達の子ども理解をもとに、有効な教材を用意し、自然の事物、現象に親しみ、事象の意味を理解する教育を考える。	
	生活	総合的学習の時間の導入との関連をみつつ、生活科の趣旨、成立過程、目標とその中心概念、生活科の特徴について理解を深めることを目標として講義を行う。講義は、学習指導要領、生活科解説書に自作教材を組み合わせて、授業風景をイメージできるように工夫して行う。理論だけではなく、具体的な授業のイメージを把握することができるようになってほしい。そこで、教材や活動での児童の反応を児童作品、感想文などで提示し理解を深めていく。	
	音楽	初等教育（小学校および幼稚園教育）に必要な基礎的な音楽理論を学習する。まず、西洋音楽における拍子や調性の概念について理解を深め、リズム、旋律、和声の基本的な仕組みについて学ぶ。こうした理論的な学習を基盤として、リズム創作、旋律の創作、歌の伴奏づけなどの実践的な学習も行う。また、移動ドや固定ドの問題など、理論的な学習と関連する音楽教育のトピックについても解説していく。したがってピアノをはじめとする鍵盤楽器にとどまらず、様々な楽器の構造と特質、声楽についても基礎的理解を進める。	
	家庭	小学校の家庭科では、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身につけるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てることを目標としている。そのため、本授業は、1 家庭科の目標や内容、2 家庭科の指導に必要な教材研究、3 家庭科の実験・実習の配慮事項と実際の体験、4 指導案作成と模擬授業などを通じて家庭科教員としての資質を養う。	
	図画工作	図画工作科の各内容（造形遊び、絵や立体、工作、鑑賞）に関する基礎的な知識や技能を、実際に表現活動や鑑賞活動を体験することを通して習得する。具体的には、身近な材料や用具を用いた「描く」「つくる」「つたえる」等の表現活動と、さまざまな分野の作品を「見る」「考える」「批評する」等の鑑賞活動を、両者を関連付けて行うことにより、造形や美術に対する基礎的な知識や技能を効果的に学べるようにする。図画工作に必要な素材や画材の性質や特徴についても把握する。	
	体育	体育では、小学校学習指導要領に示された各種の運動の実技を行う。体育の指導に関して、現場の小学校教師の多くは「自分が出来ないことを教えるのは苦手」と感じている。そこで、この授業を通して、実技の能力を高めるだけでなく、各種の運動の指導方法を身に付けること＝「自分は出来なくても教えることは出来る」ようになることを目的とする。主な内容は、「体づくり運動」「器械運動」「陸上運動」「水泳」「ボール運動」「表現運動」である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども理解領域	音楽実技 1	小学校教育や幼稚園教育において、ピアノをはじめとする様々な楽器を教師が演奏できることや、モデルとして歌唱できることは、子どもの歌唱指導や様々な楽器の演奏指導における基本的に必要とされる力である。そのために、学生個々の能力・進捗等に応じて少人数のグループに分け、各グループ同時にピアノを中心とする鍵盤楽器を用いての個人レッスンや発声法、歌唱法のレッスンを行い、楽器演奏や歌唱に関する基礎的な知識と技術を習得する。	
	音楽実技 2	初等教育の音楽教育に必要な、応用の利くピアノ演奏や楽器演奏、独唱や合唱の技術の習得を目的とする。ピアノを初めとする様々な楽器に子どもたちが楽しく触れ、自発的な関心興味をもって音楽活動に取り組むための基礎とするため、学生自らが楽しく楽器を弾くこと、伴奏付け、弾き語り、移調奏等、児童教育や幼児教育の現場において役立つ演奏能力の修得を目的とする。学生個々の能力・進捗等に応じて少人数のグループに分け、個人レッスンや発声法、歌唱法のレッスンを行い、楽器演奏や歌唱を楽しく指導できる力をつける。	
	音楽実技 3	幼稚園教諭として必要な、音楽に関する基礎知識及び基礎技術を土台として、より音楽性を高めるとともに、豊かな感性と創造性の育成を目標とした器楽演奏技術の習得と指導の仕方を学ぶ。さまざまな楽器を使うとともに、自己の身体をはじめ、身の回りにある事物を活用して、創造的な音楽活動ができるよう、幼児教育にふさわしい手遊び歌やお絵かき歌、幼児のための合奏指導技法を、学生自らが実践する中で指導技術を習得する。	
	特別支援教育学総論 A	障害のある人々の社会における処遇の歴史を振り返り、その存在が否定されていた時代から、人間としての権利が尊重され、成長・発達の可能性が保障されるようになる過程の概略を述べる。さらに、社会のシステムとしての教育の制度を概観し、とりわけ学校教育における障害者教育、その中での視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱、発達障害、言語障害、情緒障害などの幼児、児童、生徒への教育的対応の内容と方法について概略を述べる。	
	特別支援教育学総論 B	学校教育における障害のある子どもたちへの対応について明治時代以降を歴史的に概観し、さらに戦後の教育制度の中での、障害の種類、程度に応じた教育のシステムを詳述する。視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱、発達障害、言語障害、情緒障害など、様々な障害について概観し、その教育的対応について詳述する。また、特別な支援を必要とする対象児への通常学級での支援、交流および共同学習について概説する。	
	知的障害の病理	知的障害のある児童・生徒が心身ともに健康で元気に学校生活を楽しみ、授業や活動等に参加して人間的に大きく成長することは、心身障害のない児童・生徒の場合以上に重要である。本授業では、知的障害の特性や基本症状が彼らの学校生活にどのような制約を与えるかを理解し、特別な教育的支援の方策と課題について考察することを目標とする。授業では、知的障害の概念、種類と成因、他の発達障害（広汎性発達障害など）との関係、併存症、健康支援の方法、教育と医療の連携、地域支援システムの現状と課題などを講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども理解領域	病弱の心理・生理・病理	慢性疾患で長期療養を必要としている児童・生徒が心身ともに健康で元気に学校生活を楽しみ、授業や活動等に参加して人間的に大きく成長することは、心身障害のない児童・生徒の場合以上に重要である。本授業では、小児慢性疾患の特性や基本症状が彼らの学校生活にどのような制約を与えうるかを理解し、特別な教育的支援の方策と課題について考察することを目標とする。授業では、小児慢性疾患の概念、種類（てんかん、膠原病、小児心身症など）、医学的治療の概要、教育と医療の連携、長期療養に伴う課題などを講義する。	
	病弱教育総論	病弱教育の歴史的な動向や小児慢性特定疾患などの難病の子どもの抱えている教育課程を概説するとともに、特別支援学校又は院内学級における教育課程編成の実際や自立活動の在り方、学習内容の精選等について学校事例を具体的に取り上げ検討する。また、子どもたちのセルフケアの指導の実際とその課題を明らかにしていく。そして、支援者は、自立に向けて子どもたちの自己管理能力をどう育てるのかを、自立活動の指導法として事例を取り上げ、個別の指導計画等をもとに概説していく。	集中
	肢体不自由の生理と病理	肢体不自由のある児童・生徒が心身ともに健康で元気に学校生活を楽しみ、授業や活動等に参加して人間的に大きく成長することは、心身障害のない児童・生徒の場合以上に重要である。本授業では、肢体不自由の特性や基本症状が彼らの学校生活にどのような制約を与えうるかを理解し、特別な教育的支援の方策と課題について考察することを目標とする。授業では、肢体不自由の概念、種類と成因（神経疾患、筋炎、関節炎、発達性協調運動障害など）、合併症、健康支援の方法、教育と医療の連携、地域支援システムの現状と課題などを講義する。	
	肢体不自由者教育論	肢体不自由の定義、種類と発生原因、肢体不自由児者の発達様態の基礎知識を学び、乳幼児から児童期青年期前期にわたる各発達段階における心理特性をふまえ、肢体不自由児者教育の制度、教育課程、指導法、指導内容の変遷と現状、そして特別支援教育学校の教育課程の特徴である自立活動について講義する。肢体不自由児・者が、重度・重複化しており、学校教育において医療的ケアを要する児童、生徒に対し、教師の専門性を発揮するかかわりとは何かについて学修する。	
	体験活動方法論A	地域の教育・福祉・医療・研究などの多様な現場における活動に参加する「体験活動」の意義について講義する。また、体験活動に参加するための手続きと倫理的配慮、さらに社会的礼儀、についても指導する。小グループで各自の体験を報告する機会を設け、学びを共有することによって、教育発達学の理論を実際の経験に結びつけることができるように授業を進める。体験活動先の決定や連絡調整については、心理学部体験活動サポート室が支援する。	
	体験活動方法論B	体験活動方法論Aで学修したことをもとに、各自が行った教育・福祉・医療・研究施設における体験活動を通じて生じた疑問や課題について討議を繰り返しながら問題解決の方法について学ぶ。年間の活動を報告し合う「体験活動報告会」を開催し、多様な支援の場について相互に情報交換し、さらに、活動を通して実体験として習得した知識や未解決の課題について討議する。報告会の運営は、心理学部体験活動サポート室と学生が協力して行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域 学科科目	障害児・者心理学1 (コミュニケーション)	障害者の行動を理解し、発達を支援するには、そのコミュニケーション行動に関する理解が必要である。言語の困難を主とする広汎性発達障害、読み書きに困難を示す学習障害、そして知的障害や重複障害などコミュニケーション困難な障害について概説する。その上で、コミュニケーション行動に関する問題とそれに対応する応用行動分析における指導技法を紹介し、実際に事例における行動改善のための指導について検討していく。障害をもつ子どもに対する最近の研究から、実践に活かすための手法についても講義する。	
	障害児・者心理学2 (行動)	障害のある子どもたちの行動を理解し、その発達を支援し、教育指導を円滑に行うにあたって必要な基礎知識を学ぶ。発達障害を中心として、そのアセスメントの技法、日常生活における問題と二次障害について紹介する。さらに、行動面の障害に対して応用行動分析を適用し、発達支援と教育指導を実際におこなった最新の事例研究をもとに、子どもたちにどのような支援が可能で、その結果どのような行動的な変化がみられるのかを検討し、具体的な行動変容の教育方法を学ぶものとする。	
	障害児・者心理学3 (学習)	障害のある子どもたちの学習行動に関する問題とその教育指導について、学習心理学、学習理論を解説しながら取り扱う。発達障害児に見られる学習上の問題を取り上げ、読む、書く、計算するなどの課題において子どもたちが示すつまづきと認知能力障害との関係を考えることにより学習面の困難さの背景を理解できるように講義する。また、読む、書く、計算することにおける困難さがどのような症状として表れ、どのような援助が求められているのかを具体的な事例を通して紹介する。	
	肢体不自由者の心理	肢体不自由者の様態として脳障害に起因する児童が増加していることは、単なる四肢の機能不全ではなく、知的障害その他の感覚障害を重複していることも多い。そのため重大な心身の発達と教育にかかわる問題となっていることを理解の基盤とする。発達の基礎的理解を踏まえて、さらに肢体不自由をもたらずさまざまな起因を理解した上で、肢体不自由児教育における歴史的な変遷、特に医学的アプローチ、教育的アプローチ、学習心理学的・行動理論的アプローチ、そして臨床心理学的アプローチについて講義する。	
	学校心理学	アメリカにおけるスクールカウンセラー、スクールサイコロジストと我が国のスクールカウンセラーとの比較を行いつつ、アメリカのスクールサイコロジーと我が国の学校心理学について概観した後、スクールサイコロジーを支えている心理学の学問領域（発達心理学、学習心理学、学級集団に関わる社会心理学、特別支援教育、臨床心理学、教育評価・査定等）について学んでいく。さらに最近我が国でも導入が始まったスクールソーシャルワーカーの役割を含め、学校心理学全体についての基礎的理解を深めるものとする。	
	教育相談の理論と方法	教育相談と生徒指導は対立的なものとして理解されがちである。しかし広義の生徒指導と教育相談は、児童生徒が自らの人生を豊かに切り開くために、自らを認め、高め、そして人生をつくっていく力を育てるという意味では共通である。本授業は、生徒指導と教育相談のそれぞれの役割を対比させながら、教育相談の基本となる教育的、心理学的な人格理解と成長発達の考え方を学び、児童期の発達課題と心理と行動を査定評価する見方、発達障害の児童の理解、そして児童生徒の心に寄り添う具体的なカウンセリングの方法について学習する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域 学科科目	幼児理解の理論と方法	幼稚園における保育を通して、子どもは何を体験し、どのような発達的变化をしているのか、保育内容や保育者・仲間とのかかわりの質との関連から論じる。また、幼稚園教育要領を基本として質の高い保育を実践するために、保育者自身が自分の保育を振り返り、一人ひとりの子どもの行為とその意味を理解するための視点を広げ、深めるための保育カンファレンスの重要性とその方法を論じた上で、さまざまな問題を抱えた子どもへの保育的支援と同時に健全な子どもの個の発達を促す保育、クラス集団としての成長をめざす保育のあり方について考察する。	
	生徒・進路指導の理論と方法	広義の生徒指導は、学校という集団での教育力を活用して、個々の児童生徒が自らの価値に目覚め、また高めていく自己指導の力を育成するものである。そのためには、学校組織を学び、生徒・進路指導担当教員や教育相談担当教員、学級担任や、特別活動や教科指導の中での生徒指導等について理解を深める。不登校、いじめ、非行等の対応だけでなく、教師自身が学校生活や日々の生活において自己実現できるような力をもつ必要があることを、体験的に学習することを通して理解を深め、とりわけ初等教育教員として必要な生徒指導の基礎知識を学ぶ。	
	国語科指導法	小学校における国語の学習指導要領の基礎的事項（書写を含む）を講義する。あわせて国語の学習指導の実践的指導力を育成することを目的とする。PISA調査の読解力で日本の子どもたちが低いとされている「熟考・評価」の能力は「理解」よりもむしろ「表現」から育成されることから、理解領域と表現領域をリンクさせた教材開発の方法を学ぶ。学生は実際に教材開発を行い、模擬授業を行う。6～8人グループで、同時進行で模擬授業は行う。模擬授業後、学生はグループで自らの授業を振り返る。	
	算数科指導法	算数教育の歴史の変遷を捉え、現行の学習指導要領の特徴を把握する。次に算数科の目標についての考察を踏まえた上で、現在行われている全国学力・学習状況調査の結果から算数教育に係る現状を概観する。これらの事実をもとに、各内容について、学習指導上の問題点を踏まえながら論じ、算数科の授業計画の立案ができるようになることを目指す。内容の議論においては、中学校との接続に関する内容や教育のIT化を踏まえたテクノロジー利用についても触れる。これらを通して、子どもに算数を学ぶ意義や楽しさを伝えられるようになって欲しい。	
	社会科指導法	われわれ人間が個々に個性を発揮しつつ、社会的存在として生活していくには、幼児期、児童期に、児童生徒一人一人が社会的事象に関心を持ち、社会的な見方、考え方を養うことが必要である。そのためにはどのような授業を行うことが必要か考える。まず、小学校学習指導要領に呈示されている社会科の目標について解説する。次に、学習指導要領に含まれる社会科の内容について考察し、発達段階との関連、言語活動との関連について説明する。また、社会的な考え方を培うための学習方法についても講義する。	
理科指導法	理科の内容を子どもが学ぶことは、生命体としての自らの存在を尊重し、自分が存在する地球環境で自律的に生きるという主体的活動の源動力を育むことである。子どもが主体的に自然の事物や現象に関心を持ち、探究する力を育てるために、小学校理科教育の目標及び内容についての十分な理解を図るとともに、物質・エネルギーにかかわるA区分及び生命・地球にかかわるB区分のそれぞれの実験法や用具、観察法や観察手続きなどを含め、理科教育の指導法、教育法とその授業構想や指導案の作成を学修する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域 学科科目	家庭科指導法	生涯発達の視点から、現代社会における、児童期からの個人と家庭のありよう、家庭と社会のありようを理解し、生涯の見通しを持って、よりよい生活を送るための能力と実践的な態度を育成する力を養う。児童の発達段階に応じた小学校家庭科学習指導の在り方について学ぶとともに、少子高齢化や家庭の機能の変化、食育の推進、資源や環境に配慮したライフスタイルの確立など、社会の変化に対応した内容の充実を図る指導の在り方を学修する。	
	音楽科指導法	小学校学習指導要領（音楽）に示されている各学年の指導目標を、児童の発達段階に即して検討する。また、表現と鑑賞の領域の学習内容を理解し、歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞に用いられるさまざまな教材を研究する。取り扱う教材は、西洋音楽に偏ることなく、我が国の音楽や諸外国の音楽も含める。こうした教材研究を基盤として、実際の授業の組み立て方を、指導案の書き方をまじえながら学修していく。最終的に、受講生自身が模擬授業を行い、音楽科の指導方法について実践的な学習を深める。	
	図画工作科指導法	我が国や諸外国の図画工作教育の歴史を概観し、今日の小学校教育における図画工作科の意義や目的等について理解を深めるとともに、子どもの造形表現の特色とその発達の道筋について理解を深める。また、実際に表現や鑑賞の活動及び様々な材料や技法を体験し、それを指導者としての視点に立って振り返る活動を通して、教科の内容やその指導の在り方について理解を深め、図画工作科の指導に関する基礎的な知識や技能、具体的な指導案の作成と指導法の実践を身に付ける。	
	体育科指導法	本授業は、小学校の体育授業を構成する基本的な考え方及び体育授業の基礎的な実践力を身につけることを目的としている。体育授業の考え方、具体的な体育授業づくりの方法、体育授業を評価し反省する方法についてそれぞれを関連づけながら授業を行っていく。ビデオ映像など具体的な資料を提示しながら講義を行い、模擬授業を通して、体育授業の実際について理解する。映像資料等を提示しながら、より実践的体育授業にリンクした講義を行う。リフレクションの時間を含めた2回の模擬授業を行う。	
	生活科指導法	生活科が導入された背景を把握し、生活科の目的、目標とその中心概念、現代日本の初等学校教育における意義と特質を深く理解させ、授業づくりに関わる指導を展開する。優れた生活科の実践例を参考に、生活科の学習内容に合わせた子どもの活動を、VTR、児童作品、発言を中心とした授業記録、児童の感想文などを例に具体的に理解していく。また、指導案を作成し、それが生活科の授業として有効かどうかを、他の学生相手に模擬授業をして評価し合い、実際に授業がつかれるようにする。	
	道徳教育の指導法	道徳教育は、生徒が自己実現に努め、国家・社会の一員としての自覚に基づき行為しうる発達段階にあることを考慮し、児童・生徒個人が、一人の人間として、しかも社会の一員としての在り方、生き方を考え、身につけることを学校教育活動全体を通じて行うことによりその充実を図るものとされている。全教育活動を通して行う道徳教育や道徳の時間における指導論、指導法について、生涯発達、心理支援の視点から理解し、道徳の時間の具体的な指導方法を身に付ける。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域 学教科目	特別活動の指導法	特別活動は、学校教育において教科教育に並ぶ重要な教育領域である。学級活動、児童会、体育会、遠足、発表会などの学校行事、クラブ活動など児童期における学校での集団活動を主とした特別活動により、さまざまな社会体験・自然体験を経験し、自分の個性や他者の尊重、自立性など、豊かな人間性や社会性を形成する重要な活動である。この特別活動の意義を理解し、特別活動を推進する指導法、特別活動を指導する教師の資質について学修する。	
	小学校英語研究	外国語活動の目標を達成するために、具体的な指導方法に関する知識を深めることをねらいとする。特に、英語学習を支える教材を検討・考案し、活用すること、子どもにとって身近な学校生活にかかわる教室での英語表現をテーマとする。「小学校英語活動」に引き続き、クラスでの討議を重ね、外国語でのコミュニケーションについて考え、指導法や教材を工夫し模擬授業につなげていく。子どもたちが楽しんで英語を学習することができるような指導力を養うことが目標である。	
	保育内容の指導法	幼稚園教育は、幼児を保育し心身の発達を助長することと学校教育法は定めている。保育とは、保護し、育成する、すなわち養護と教育を意味している。幼稚園教育要領では、保育の内容を5領域（言語、健康、人間関係、環境、表現）に分けて規定している。ここでは、幼児教育者として適切な幼児教育を進めるために、幼児の発達の実態把握ができる知識と能力を基盤に、それに応じた保育内容の基礎的知識と発達に応じて適切な内容を選定し実施する指導力を養う。	
	保育内容（健康）	幼稚園教育要領の基本理念や改訂事項、保育内容「環境」の基本的な視点、保育と環境の意義、指導上の留意点や問題点等に関して、テキスト等を用いて概説しながら、「幼児が自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」環境づくりについて理論的、実践的に理解させる。また、実践的な問題解決能力を高めるため、幼小連携を含め、保育内容「健康」の視点からのグループ討議、授業ノートやレポート作成を通して、幼児と健康とのかかわり、環境をデザインするポイント等を検討させる。なお、「安全教育」等は必要に応じて関連資料で検討させる。	
	保育内容（環境）	幼稚園教育要領の基本理念や改訂事項、保育内容「環境」の基本的な視点、保育と環境の意義、指導上の留意点や問題点等に関して、テキスト等を用いて概説しながら、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」環境づくりについて理論的、実践的に理解させる。また、実践的な問題解決能力を高めるため、幼小連携を含め、保育内容「環境」の視点からのグループ討議、授業ノートやレポート作成を通して、幼児と環境のかかわり、環境をデザインするポイント等を検討させる。	
	保育内容（人間関係）	新生児、乳児期からの、母を代表とする重要な養育者とのアタッチメントの形成をはじめとして、幼児期、そして児童期へと、重要な他者対象との関係性を軸として、子どもたちは発達し、さまざまな他者との関係を広げていく。乳幼児発達心理学の視点から、そうした子どもの人間関係の様態の理解と人間関係を育む指導の方法を学ぶ。同時に学生自らの人間関係について目を向け、教育発達学科の学生として、自らを心理支援し、豊かな人間関係を展開させ、幼稚園教諭としての資質を高める助けとする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域	保育内容（言葉）	領域「言葉」は、経験したことや考えたことを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や、言葉で表現する力を養うとされている。ここでは、生涯発達的基础としての「言葉」の発達、保育者の援助について学ぶ。乳幼児期に日常生活・遊びを通して身近な環境とかわり培われる経験や感覚、認識、やりとりが重要であること、また、絵本・紙芝居などの文化財との関わりや保育方法について、そして知的発達や感情・意欲・態度、想像性などの発達との関連性について理解する。	
	保育内容（音楽表現）	幼児は生活の中で感じたこと、考えたことなどを、声や音、言葉、動きなどで自由に、自分なりに表現して楽しむ。ここでは、幼児の固有な音楽表現の具体的な姿を理解し、共感できる感性を養い、幼児が自ら音楽的表現の喜びを味わいながら、情操、想像力、創造性を育むことができる幼児の音楽的発達になつた音楽表現教材と指導法を学ぶ。大人として歌唱・楽器表現、即興・創作表現の喜びを味わい、音楽的な感性を高めることも合わせて目指している。	講義 20時間 実習 10時間
	保育内容（造形表現）	幼児期における創造活動は、人が生涯にわたって情操豊かな生活を営む基盤となる体験活動である。幼児は自然の事物に対し、遊びながら五感を通して触れ、絵を描く、ものをつくるなどの造形的な活動をする。ここでは、幼児が遊びのなかで、つくるという創造的な造形表現活動をしなが、発見、工夫しつつ成長していく過程を理解し、幼児教育における幼児の造形的表現活動の意義や実際の活動について学ぶ。幼児の創造的造形活動と表現活動を育む環境の理解と設定についても学修する。	講義 20時間 実習 10時間
	障害児教育相談とアセスメント	障害児とその家族を対象とした教育相談を実施していくための基礎的な知識を修得することが目的である。相談の進め方、相談に必要な情報の収集方法について知ることから始め、子どもを理解する手段の一つである心理検査の種類と実施方法について演習形式で学ぶ。また、検査結果を解釈し、結果に基づく支援の方法を考え所見として書き表す技術も修得する。相談活動を通じて必要な倫理、家族の心情への配慮、対象児の特性に合わせたアセスメントの方法については特に重点を置いて講義する。	
	障害児教育学特講1 （教育課程）	我が国の障害児教育の歴史にみる教育内容を踏まえて、現在の特別支援学校の知的障害者、肢体不自由者、病弱者に関する教育領域の教育課程がどのように形成され、成立してきたかについて学ぶ。そのことによりこれまでと現在の教育理念の変遷とそれによる教育課程の変遷を学び、とりわけ現在の、幼稚園部、小学部、中学部、高等部の教育課程それぞれの特徴と年齢段階に応じた配慮事項について講義する。さらに、教育課程を実施していく上での配慮事項、年間授業計画、個別の指導計画、個別の教育支援計画について講義する。	
	障害児教育学特講2 （指導法）	障害児教育学特講1で理解した特別支援学校の教育課程の特質から、特別支援学校に在籍する児童生徒の特徴と教育的ニーズについて紹介する。次いで特別支援学校の各学部、幼稚園部、小学部、中学部、高等部において行われている実際の授業と児童生徒に配慮した指導法について紹介し、その実践方法について講義する。また、各教科、教科・領域を合わせた指導、行事等の指導案を紹介し、分析することを通じて、指導案作成の方法について講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 子 ど も 支 援 領 域	知的障害教育学総論	我が国における知的障害教育がどのように行われてきているのか、その制度的枠組み、教育対象、指導法の変遷などを総合的に概観する。知的障害とは何か、その病理的、心理的特性について概観し、その障害をもつ幼児児童生徒を対象とした教育の歴史を振り返る。戦後から近年の教育制度における、知的障害児教育の位置づけを概観する。次いで、知的障害のある幼児児童生徒を対象とした教育課程の実際と課題について論ずる。生活単元学習、作業学習などの実際と、通常学級での支援、交流および共同学習の実際と課題について論ずる。	
	視覚障害教育総論	我が国の障害者教育の歴史において、視覚障害者の教育はもっとも早く行われたものといえよう。近代教育システムに先立つ視覚障害者への社会的処遇等について広く歴史的に概観しつつ、視覚障害の病理的及び教育的な理解と、予想される教育的ニーズについて解説する。その上で、視覚に障害のある児童生徒に対する教育的支援の基本的な方法を、自立活動領域については知覚及び言語の発達支援、また教科学習の支援については、盲の子どもの場合と弱視の子どもの場合とに分けて具体的に説明する。	
	聴覚障害教育総論	聴覚障害者は、外見的には障害の有無が他者にはわかりにくいため、聴覚障害者本人の聴覚障害の程度とは異なる次元の社会的障害を受けやすい可能性がある。そうした現状を踏まえた理解の上に、難聴の種類や特徴、病理の理解、聴覚障害児教育の歴史と現状を紹介する。次に、聴覚障害者のコミュニケーション手段の基礎的な知識を学習する。また、聾学校での授業の特徴を説明し、聴能訓練、発音指導など、自立活動の項目も取り上げて講義する。最後に、聴覚障害児教育の中心課題である早期教育や言語活動について講義する。	
	障害児基礎実習 A	障害のある子どもの心理支援・教育支援の方法と課題、支援者としての適切な態度を実践的に学ぶことを目標に実習形式で授業を行う。障害児系実習科目（障害児基礎実習 A・B、障害児実習 A・B）の入門編として、行動観察、心理検査など障害のある子どもの実態把握の方法を学ぶ。履修者は障害児実習Aの履修者（4年次生）、心理学専攻大学院生からなる支援チームに加わり、実際に心理学部附属心理臨床センターに来談している子どもの実態把握および指導プログラムに参加する。	
	障害児基礎実習 B	障害児基礎実習Aに引き続き、障害のある子どもの心理支援・教育支援の方法と課題、支援者としての適切な態度を実践的に学ぶことを目標に実習形式で授業を行う。子どもや保護者と実際に接し、親和的・友好的態度で接することや、指導プログラムの各セッションで任された役割を果たす方法などを実践的に学ぶ。履修者は障害児実習Bの履修者（4年次生）、心理学専攻大学院生からなる支援チームに加わり、実際に心理学部附属心理臨床センターに来談している子どもの実態把握および指導プログラムに参加する。	
障害児実習 A	障害のある子どもの心理支援・教育支援に関する一連の実習科目の応用展開編である。3年次の障害児基礎実習での学修は、個別指導計画の立て方に先立つ子どものアセスメントの方法、そのための見学・観察実習が主であったが、その学修を基盤に、実際に発達障害の児童及びその保護者を対象に、発達のアセスメントをし、支援目標と指導計画を立てることを実際に行うとともに、児童への直接の指導実習および保護者への助言実習という参加・指導型実習を行う。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域	障害児実習 B	障害のある子どもの心理支援・教育支援に関する一連の実習科目の応用展開編である。春学期の障害児実習 A では、発達障害の児童及びその保護者を対象とした支援目標と指導計画を立て、児童への直接の指導実習および保護者への助言実習を振り返り、対象児の発達や保護者のニーズの再アセスメントをし、短期及び中長期の支援目標と指導計画を再度構成しなおすとともに、児童への直接の指導実習および保護者への助言実習という参加・指導型実習をおこなう。	
	教育実習 1	講義や演習を通じての学修を、実際の教育現場である学校で実践することにより、教師を目指す者としての自覚をもって教育の意義や厳粛さを理解することを目的とする。そのために入念な事前指導を行い、学習指導案の作成に関する総復習、実習日誌の記録方法、実習生としての心得について指導する。実習校では観察実習や実習校での担当教員の指導を受けつつ、指導案を立て、教壇実習を行う。事後指導では実習期間全般を通じての振り返りに加え、研究授業を中心に報告と討議を行い、実習体験を深めていく。	共同担当 (6名)
	教育実習 2	幼稚園での教育実習とその事前・事後指導を行う。幼稚園での教育実習を通して、幼児指導の方法や、幼稚園運営についての実践的知識・技術を習得する。事前指導として、幼稚園教育の特徴、制度的位置づけを理解し、歌唱・手遊び・折り紙・読み聞かせ等、保育実践にむけた十分な準備に加え、挨拶や掃除、体調管理等、基本的な生活習慣の見直しを図る。事後指導として、実習で行った設定保育等の時間の指導案と模擬授業を通して、実習での体験を定着させる。	共同担当 (2名)
	特別支援学校教育実習	児童生徒の実態把握の方法、指導案の作成力、教材を工夫する力、授業を行う力、障害のある児童生徒の人権尊重に対する意識等、特別支援学校教諭として習得しておくべき技術、実践的知識、態度、意識を身に付けることを目標としている。実習期間中は担当教員が実習校を個別に訪問し、実習生の指導に当たるとともに研究授業等に参加する。事前指導は講義と演習形式により行う。事後指導は、履修者全員が順次実習内容を報告し、それをもとに他の履修者、担当教員とともに討議する演習形式にて行う。	共同担当 (3名)
	教育発達学演習 1	(1緒方明子) 1・2年次で学んだ教育発達学の基礎を土台として、障害児者心理学の領域を深めていく。障害児者心理学を学修するためには、先ず障害児者と接する経験が必要である。また、障害を持って日本の社会の中で生活するときに、どのような生活の場があるのか、どのような支援の場があるのかを見学を通して知ることが必須である。演習 1 では、学校や施設等の見学から課題を発見することと、先行研究から課題を発見することを平行して行う。そして、それらの課題を解決する方法について考察する。  (2金子健) 障害のある人々および特別な支援を必要とする人々が、幼少期から学齢期、成人に至るまで、その生涯の各ライフステージのそれぞれで、学校や地域社会において充実した自律的生活を送る為にあるべき支援について、心理学的的方法論をベースにしつつ、さらに教育学、障害科学を統合した教育発達学的観点から文献研究や実地見学、観察、実態調査等を通して現状を理解し、自らが障害のある人々と社会に対して何をなすうのか、問題意識を探る。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域	教育発達学演習 1	<p>(3小林潤一郎)</p> <p>教育発達学を構成する障害科学分野のうち、障害児医学の視点から、障害のある子どもの心の健康支援と教育支援に関する現状と課題を理解することを目標に、演習形式の授業を行う。自閉症、アスペルガー症候群、知的障害などの発達障害、運動障害、慢性疾患などの医療の現状、医療と教育をめぐる課題について、履修者が分担して文献を読み、発表し、討論する。施設見学、ボランティア活動、支援プログラムの運営など授業外での活動を通じて実践的学習を推進する。</p>	
		<p>(4清水良三)</p> <p>春学期、秋学期にわたって、障害のある子どもを含め、子どもの学習と発達にかかわる領域を対象として、とりわけ子どもや教師、保護者のメンタルヘルス等の心の健康教育、ストレスマネジメント教育、スキル・運動学習の心理、自己の発達心理などにかかわる文献、書籍を選び、輪読し、教育発達学に即した文献の収集、実態見学、観察、調査、実験など適切な方法を学び、夏季休暇中にはそれに基づき、実証的にデータを収集し、討論し、ゼミ論文あるいは手引きや視聴覚教材、教育教材の製作を行う基礎力を養う。</p>	
		<p>(5藤崎真知代)</p> <p>乳幼児から児童期における子どもの発達と教育との関連、及びそれらに影響を及ぼす要因について理解を深めるために、まず文献検索の方法について学修し、レジュメを作成し論文を批判的に読む力も培うようにする。その上で共通するテーマに関する国内外の文献を取り上げ輪読するだけでなく、適宜視聴覚教材の視聴も含め討論し、より現代的課題とも関連づけて考察を深める。さらに各自の興味・関心を深めるために共通テーマを設定しグループ研究を行う。施設見学なども実施し、さまざまな現場を知ることを通して、各自のキャリア形成にもつなげていく。</p>	
		<p>(6新井哲夫)</p> <p>学期は、テキストの輪読とディスカッションを通して、図画工作科教育の歴史や現状、今日的な課題等に関する基礎的な理解を図る。後期は、図画工作科教育に関する事柄の中から、各自の関心や問題意識に基づいてテーマを決め、関連資料の収集・分析、文献調査等を行い、随時その成果を発表することを通して、課題追求の基礎的なスキルを身に付ける。春・秋学期を通じて小学校等の教育現場を訪問する機会を設け、図画工作科教育の現状や実態について実感を伴った理解が得られるようにする。</p>	
		<p>(7岩辺泰史)</p> <p>教育学、心理学、障害科学を統合する教育発達学の視点から、教科「国語」に関して、内外の文献あるいは教育実践などを概観する。文献や実践資料は、各自の国語に関する関心から選択し、報告し、輪読し、受講者全員で討論することによって問題意識を共有する。幼児・児童等の教育発達に関して、国語を通して支援する観点から、現代社会における国語の実際的課題について調べ、さらに実際の国語教育の現場を観察する等を通して、この分野における研究の方法を学び深める。</p>	
		<p>(8下田好行)</p> <p>教育発達学の視点から、視聴覚機材やコンピューターを含めた様々な教育の方法および技術等の教育方法学の領域に関して、内外の文献あるいは教育実践資料などを概観するとともに、幼児・児童等を支援する観点から、具体的な授業の進め方、適切な教材の使用と機器の使用など、実際的課題について各自がテーマを設定して調査・観察等を行い、結果を報告し、受講生全員で討議し、教育方法学の領域における実証的研究と実践のあり方について学ぶものとする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域 学科科目	教育発達学演習 1	<p>(9松村茂治)</p> <p>教育発達学の視点から、教育心理学、学校心理学に関して、内外の文献あるいは教育実践などを概観する。毎回レポーターを決め、学校臨床に関する論文（主に和文）の講読を行う。講読する論文は、受講生の主体性に任せるが、原則的には教育心理学研究、LD研究、カウンセリング研究など、学会誌に掲載された論文の中から選ぶものとする。この作業を通して、幼児・児童等の教育発達を支援するための、現代社会における実際的課題について調査・観察等を行う研究方法について学ぶ。</p>	
		<p>(10水戸博道)</p> <p>教育学、心理学、障害科学を統合する教育発達学の視点から、教科「音楽」に関して、内外の文献あるいは教育実践などを概観する。特に、われわれ人間にとって音楽を「聴く」ということはどのようなことなのかを、音楽の認知心理学の研究成果をもとに考える。そして、幼児や児童において、音楽の認知的技能がどのような道筋で発達していくのかを、旋律、リズム、和声の知覚を調べた実験的研究を紹介する等を通して受講生全員で討論し、考えていく。</p>	
		<p>(11湯川秀樹)</p> <p>教育発達学の視点から、幼児教育行政、幼児教育課程、及び保育内容「健康」や保育内容「環境」を中心に、国内外の文献、教育実践研究などをまず概観し、国内外における幼児教育の実態を理解し、討論を行う。その上で、各自の興味・関心に基づいてテーマを絞りながら、視聴覚教材なども活用しつつ、実際に幼児教育施設などを見学することを含めて、現在社会における実際的な課題について理解を深め、教育課程や保育内容に関する実践的研究の方法についても学ぶ。</p>	
		<p>(12辻宏子) 教育発達学の視点から、教科「算数」に関して、内外の文献あるいは教育実践などを概観するとともに、幼児・児童等を支援する観点から、現代社会における実際的課題について調査・観察等を行い、この分野における研究方法について学ぶ。算数科及び数学科に関する国内外の各種調査の背景やその結果を分析し、算数教育にかかわる現状を捉えるための評価の方法について知る。到達目標として、諸外国の動向を知るとともに、子どもの算数に係る事柄を評価するための問題の作成などに取り組むことができるようにする。</p>	
		<p>(13出井雄二)</p> <p>教科「体育」に関して、教育学、心理学、障害科学を統合する教育発達学の視点から内外の文献あるいは教育実践資料などを概観する。現代社会における幼児・児童等の教育発達を、体育を通して支援する観点から、各自が実際的課題についてテーマを定め、文献や資料を読み、報告し、受講生全員で討議を深め、共通理解を図る。その上で実際の教育現場での体育教育について見学や観察・調査を行い、教育発達学に関する課題を発見し、実証研究について学ぶものとする。</p>	
		<p>(14長谷川康男)</p> <p>教育発達学の視点から、教科「生活」に関して、内外の文献あるいは教育実践などを概観して、生活科とはどのような教科であるかを深く研究する。生活科の成立過程を踏まえてその本質の理解を深めるとともに、幼児・児童等の教育発達を支援する観点から、生活科に関連する現代社会における実際的課題について調査・観察等を行い、結果を持ち寄って討議し、生活科研究を通して、教育発達学という分野における研究方法について学ぶ。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目  子 ど も 支 援 領 域	教育発達学演習 2	(1緒方明子) 演習1で各自が見出した課題について、先ず先行研究のレビューから開始する。順次、先行研究をまとめて報告し、討議を重ねながら問題と目的を明確にしていく。さらに、研究目的を達成するための研究方法を決定し、データを収集して論文にまとめる。論文の作成途中では経過報告を行い、全員で協議しながら考察の観点を集約していく。完成した論文については、発表会を実施し、大学院生を含めた他学年の学生との討論も行う。	
		(2金子健) 障害のある人々および特別な支援を必要とする人々が、幼少期から学齢期、成人に至るまで、その生涯の各ライフステージのそれぞれで、学校や地域社会において充実した自律的生活を送る為にあるべき支援について、心理学的的方法論をベースにしつつ、さらに教育学、障害科学を統合した教育発達学的観点から文献研究や実地見学、観察、実態調査等を通して現状を理解し、問題意識を深めるとともに、これらの学修を通じて、自らの進路設計を計る。	
		(3小林潤一郎) 教育発達学演習1での学修を踏まえ、障害のある子どもの心の健康支援と教育支援に関連して、履修者が個々に関心のある課題を選択し、その課題を分析・検討するための科学的方法を理解することを目標に、演習形式の授業を行う。履修者がそれぞれ選択した課題について、先行研究を収集して読み、その研究の方法論上の特徴や問題点を発表し、自らの課題の分析・検討方法について討論する。またボランティア活動、支援プログラムの運営など授業外での活動を通じて実践的学習を推進する。	
		(4清水良三) 春学期、秋学期にわたって、障害のある子どもを含め、子どもの学習と発達にかかわる領域を対象として、とりわけ子どもや教師、保護者のメンタルヘルスにかかわる心の健康教育、ストレスマネジメント教育、スキル・運動学習の心理、自己の発達心理などから各自のテーマを選び、そのテーマに即した文献の収集、実地見学、観察、調査、実験など適切な方法により、実証的にデータを収集し、討論し、ゼミ論文あるいは手引きや視聴覚教材、教育教材の製作等という形で結実させる。	
		(5藤崎真知代) 教育発達学演習1に引き続き、乳幼児から児童期における子どもの発達と教育との関連、およびそれらに影響を及ぼす要因について、さらに各自の興味・関心を絞りこむために国内外の文献講読を行いながら討論を深めテーマを焦点化する。また、さまざまな施設見学や体験活動、教育実習などを通して、発達理論・研究と現場実践とのつながりについての理解を深め、各自の進路選択を視野に入れながら具体的なテーマに即して実証的な資料収集を行い、個人またはグループでの卒論研究の執筆へと展開していくようにする。	
		(6新井哲夫) 教育発達学演習1での図画工作を通じた教育発達学の基礎的な演習を踏まえ、各自が設定したテーマに沿って先行研究の検討、関連資料の収集・分析、文献調査等を行い、その成果は随時報告し、相互の学問的啓発を図る。その後、それまでの研究成果を踏まえて何らかのオリジナルな見解や視点を含んだ論文(教材開発、作品等を含む)を完成させ、発表する。必要に応じて学外の施設(小学校、美術館・博物館等)を見学する機会を設ける。その作業を通して、自らの問題意識を深め、課題解決のための科学的方法論、教育発達学の視点について学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域 学科科目	教育発達学演習 2	<p>(7岩辺泰史)</p> <p>教育発達学演習 1 での学びを基礎として、内外の文献あるいは教育実践等の先行研究を基礎として、自らの問題意識を深めるとともに、子どもの可能性を育む授業のあり方を探求し、模擬授業を繰り返しながら発達を支援する授業について認識を深めていく。また、模擬授業に関する討議を通して、各自の関心のあるテーマを見つけ、追求し、各自が課題を設定し、課題解決のための科学的方法を学びながら、卒業研究の執筆へと展開していく。</p>	
		<p>(8下田好行)</p> <p>教育発達学の視点から、視聴覚機材やコンピュータを含めた様々な教育の方法および技術等の教育方法学の領域に関して、教育発達学演習 1 での学びを基礎として、内外の文献あるいは教育実践などを先行研究として参照し、自らの問題意識を深めていく。そして、各自が課題を設定し、課題解決のための実証的、科学的に教育方法学の研究と実践の様態を学びながら、卒業研究の執筆へと展開していく。</p>	
		<p>(9松村茂治)</p> <p>教育発達学の視点から、教育心理学、学校心理学に関して、内外の文献あるいは教育実践などを概観する。とりわけ、応用行動分析、事例の実験デザイン等のテキストを参考に、臨床領域でのデータ収集の方法、論文の読み方、書き方について学ぶ。さらに教育心理学研究、LD研究、カウンセリング研究など、学会誌に掲載された論文の中から各自のテーマに沿って講読対象を選び、輪読する。この作業を通して、幼児・児童等の教育発達を支援するための、自らの問題意識を深め、課題解決のための科学的方法論について学ぶ。</p>	
		<p>(10水戸博道)</p> <p>教育発達学演習 1 での学びを基礎として、音楽の認知と教育に関する内外の文献あるいは教育実践などを先行研究として参照し、自らの問題意識を深める。特に、カラオケやJ-POPといった現代の音楽文化が、若者の音楽行動をどのように特徴づけているのかを調査する。そして、こうした音楽行動の特徴が、若者の音楽的技能の獲得にどのように寄与しているのか、それは幼児期や児童期の音楽認知に関する発達様相とどう関連しているのかを明らかにすることを通して、各自が課題解決のための科学的方法を学びながら、卒業研究の執筆へと展開していく。</p>	
		<p>(11湯川秀樹)</p> <p>教育発達学演習 1 に引き続き、教育発達学の視点から、幼児教育行政、幼児教育課程、及び保育内容「健康」や保育内容「環境」を中心に、国内外の文献、教育実践研究などを概観し、幼児教育の実態を理解しながら今日的課題について討論を積み重ねる。その上で、各自の興味・関心に基づいてテーマをさらに絞り、それを解明するために行動観察、質問紙調査、面接等を通して実証的に明らかにしていく方法、分析の観点、分析手法などについて学び、卒業研究につなげていく。</p>	
		<p>(12辻宏子)</p> <p>教育発達学演習 1 での学びを基礎として、内外の文献あるいは教育実践などの先行研究を参照して、自らの問題意識を深める。特に、数、計算、図形の領域に関する認知心理学の成果を取り入れた先行研究を講読し、算数・数学教育学研究を進めるための基礎を培う。さらに算数・数学教育学研究に関する先行研究を批判的に考察し、研究方法や課題解決のための科学的方法論について学ぶ。</p>	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域	教育発達学演習 2	<p>(13出井雄二)</p> <p>教科「体育」に関して、教育学、心理学、障害科学を統合する教育発達学の視点から内外の文献あるいは教育実践資料などを各自のテーマに沿って選び輪読した教育発達学演習 1 での学びを基礎として、実際に学校現場に赴き、自分の目と耳で子供や教員の様子を確かめることで、学校現場の体育科教育の実情についての理解を深めることを目的とする。実際に授業を参観し、子どもや教員の姿を見て声を聞いていく。その中で、自らの問題意識を深め、課題解決のための科学的方法論について学び、卒業研究の執筆へと展開していく。</p>	
		<p>(14長谷川康男)</p> <p>教育発達学の視点から、生活科に関して、内外の文献あるいは教育実践などを概観するとともに、幼児・児童等を支援する観点から、現代社会における実際的課題について調査・観察等を行い、自らの問題意識を深め、課題解決のための科学的方法論について学ぶ。教育発達学演習 1 での学修を踏まえて、生活科に関連する様々な現代社会における実際的課題について調査・観察等を行い、各自が学習指導要領に合わせて指導案を作り、教材を用意し、模擬授業を行い、自己評価と相互評価により、学修を深める。</p>	
	教職実践演習 (幼・小)	<p>(7岩辺泰史)</p> <p>教員としての使命感・責任感に基づき、心理支援力を活かした学級経営ができるように、各自の課題を発見し、不足している力を習得するために20人の小グループで授業を進める。特に、安全管理、他の教職員との協働、保護者との連携、軽度の発達障害のある子どもへの授業内支援については、ロールプレイや事例研究、実地視察等を通じて確実に習得できるように指導する。教科・保育内容等の指導力については、子ども一人ひとりの特性をふまえた指導ができるように模擬授業により指導する。</p>	
		<p>(8下田好行)</p> <p>教員としての使命感・責任感に基づき、心理支援力を活かした学級経営ができるように、各自の課題を発見し、不足している力を習得するために20人の小グループで授業を進める。特に、安全管理、他の教職員との協働、保護者との連携、軽度の発達障害のある子どもへの授業内支援については、ロールプレイや事例研究、実地視察等を通じて確実に習得できるように指導する。教科・保育内容等の指導力については、子ども一人ひとりの特性をふまえた指導ができるように模擬授業により指導する。</p>	
		<p>(9松村茂治)</p> <p>教員としての使命感・責任感に基づき、心理支援力を活かした学級経営ができるように、各自の課題を発見し、不足している力を習得するために20人の小グループで授業を進める。特に、安全管理、他の教職員との協働、保護者との連携、軽度の発達障害のある子どもへの授業内支援については、ロールプレイや事例研究、実地視察等を通じて確実に習得できるように指導する。教科・保育内容等の指導力については、子ども一人ひとりの特性を踏まえた指導ができるように模擬授業により指導する。</p>	
	<p>(12辻宏子)</p> <p>教員としての使命感・責任感に基づき、心理支援力を活かした学級経営ができるように、各自の課題を発見し、不足している力を習得するために20人の小グループで授業を進める。特に、安全管理、他の教職員との協働、保護者との連携、軽度の発達障害のある子どもへの授業内支援については、ロールプレイや事例研究、実地視察等を通じて確実に習得できるように指導する。教科・保育内容等の指導力については、子ども一人ひとりの特性をふまえた指導ができるように模擬授業により指導する。</p>		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
子ども支援領域 学科科目	教職実践演習(幼・小)	(14長谷川康男) 教員としての使命感・責任感に基づき、心理支援力を活かした学級経営ができるように、各自の課題を発見し、不足している力を習得するために20人の小グループで授業を進める。特に、安全管理、他の教職員との協働、保護者との連携、軽度の発達障害のある子どもへの授業内支援については、ロールプレイや事例研究、実地視察等を通じて確実に習得できるように指導する。教科・保育内容等の指導力については、子ども一人ひとりの特性をふまえた指導ができるように模擬授業により指導する。	
	卒業研究	(1緒方明子) 3年次までの専門科目の学修、体験活動や実習、そして演習1・2を通じて学んだ研究方法の集大成として、卒業研究が位置づけられている。各自が取り組みたい研究テーマを設定し、個人研究あるいはグループ研究として論文に仕上げていく。論文の作成に関する先行研究のレビューの方法、研究目的の設定、データの収集、引用文献の記載、対象者に関する倫理の問題、研究協力機関や研究協力者との協力関係の構築等について学ぶことも指導の目的である。	
		(2金子健) 自らの問題意識に基づいて、教育学、心理学、障害科学を統合した教育発達学の分野における課題を選択し、調査、観察、実験、介入等の科学的方法を用いてデータの収集を行ない、その分析・考察をとおして、課題への理解を深めることを学ぶ。幼児教育、初等教育あるいは特別支援教育における領域・教科等に関連して、教材研究・作品制作等をとおして、それらについての理解を深めるとともに、自らの能力開発を図る。とりわけ特別支援教育に関連するテーマで研究を進め、論文あるいは実践報告としてまとめる。	
		(3小林潤一郎) 教育発達学演習2での学修と並行して、障害のある子どもの心の健康支援と教育支援に関連して履修者が個々に選択した課題について、研究し、卒業論文にまとめることを目標に個別指導を行う。先行研究から得られた知見を検討して研究目的を明らかにし、研究仮説を立て、その検証のための方法を検討する。倫理的配慮の方法、データ収集の妥当性、現実性を吟味して、計画的に観察、調査、介入等を行い、データを科学的手法により分析する。得られた結果をもとに考察して、卒業論文を執筆する。	
		(4清水良三) 卒業研究は、大学4年間の教育課程の学習および学問研究の総括とも言えるものである。障害のある子どもを含め、教育相談や生徒指導・進路指導、子どもの学習と発達にかかわる領域を対象として、とりわけ子どもや教師、保護者のメンタルヘルスにかかわる心の健康教育、ストレスマネジメント教育、スキル学習の心理などから各自のテーマを選び、そのテーマに即した文献の収集、実態見学、観察、調査、実験など適切な方法により、実証的にデータを収集し、論文あるいは手引きや視聴覚教材、教育教材の製作等という形で結実させる。	
	(5藤崎真知代) 教育発達学演習1での学修を踏まえて、乳幼児から児童期における子どもの発達と教育との関連、及びそれらに影響を及ぼす要因について、教育発達学演習2と並行しながら各自の興味・関心に即した研究課題を設定し、国内外の文献研究に基づき、資料収集のための倫理的問題について配慮しながら観察・面接・調査等を通して実証的な資料を収集し、多変量により統計的分析、事例分析、グランデット・セオリーによる質的分析等に基づいて考察し、卒業研究としてまとめる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  子 ど も 支 援 領 域	卒業研究	<p>(6新井哲夫)</p> <p>卒業研究は、大学4年間の教育課程の学習および学問研究の総括とも言えるものである。心理学、教育学、障害科学を三本柱とし、人文・社会・自然科学・芸術・体育など多岐の領域を統合しての教育発達学という視点から、各自の問題意識を明確にし、教材研究・作品制作等を通じてまとめあげていく。とりわけ図画工作教育に関する領域で各自がテーマを設定し研究を進めるものとする。</p>	
		<p>(7岩辺泰史)</p> <p>3年次までの専門科目の学修、体験活動や実習、そして演習1・2を通じて学んだ研究方法の集大成として、卒業研究が位置づけられている。各自が取り組みたい研究テーマを設定し、個人研究あるいはグループ研究として論文に仕上げていく。論文の作成に関する先行研究のレビューの方法、研究目的の設定、データの収集、引用文献の記載、対象者に関する倫理の問題、研究協力機関や研究協力者への協力関係の構築等について学ぶことも指導の目的である。</p>	
		<p>(8下田好行)</p> <p>3年次までの専門科目の学修、体験活動や実習、そして演習1・2を通じて学んだ研究方法の集大成として、卒業研究が位置づけられている。各自が取り組みたい研究テーマを設定し、個人研究あるいはグループ研究として論文に仕上げていく。論文の作成に関する先行研究のレビューの方法、研究目的の設定、データの収集、引用文献の記載、対象者に関する倫理の問題、研究協力機関や研究協力者との協力関係の構築等について学ぶことも指導の目的である。</p>	
		<p>(9松村茂治)</p> <p>障害のある子どもを含め、教育心理学の中心的な課題である子どもの学習と発達にかかわる領域、学校心理学の領域を対象とする。子どもの認知や思考の発達、学習意欲や学習スタイル、教授－学習過程、学校集団、学級集団のダイナミクス、教師のリーダーシップ、児童生徒にとどまらず、教師や保護者のメンタルヘルスなど、様々な領域から各自のテーマを選び、そのテーマに即した文献の収集、実態見学、観察、調査、実験など適切な方法により、実証的にデータを収集し、論文あるいは手引きや視聴覚教材、教育教材の製作等という形でまとめていく。</p>	
		<p>(10水戸博道)</p> <p>3年次までの専門科目の学修、体験活動や実習、そして教育発達学演習1・2を通じて学んだ研究方法の集大成として、卒業研究が位置づけられている。音楽的発達や音楽的技能の獲得にかかわるさまざまな音楽活動を研究する。フォーマルな教育機関における音楽的訓練だけでなく、コミュニティにおける伝承システムや日常生活の音楽活動など、インフォーマルな場での幅広い音楽活動を音楽的発達や技能獲得の場として分析し、個人研究あるいはグループ研究として論文に仕上げていく。</p>	
		<p>(11湯川秀樹)</p> <p>3年次までの専門科目の学修、体験活動や実習、そして教育発達学演習1・2を通じて学んだ研究方法の集大成として、卒業研究が位置づけられている。各自が取り組みたい研究テーマを設定し、個人研究あるいはグループ研究として論文に仕上げていく。幼児教育課程、幼児教育行政、及び保育内容などに関する先行研究のレビューの方法、研究目的の設定、データの収集、引用文献の記載、対象者に関する倫理の問題、研究協力機関や研究協力者への協力関係の構築等について学ぶことも指導の目的である。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目  子 ど も 支 援 領 域	卒業研究	<p>(12辻宏子)</p> <p>3年次までの専門科目の学修、体験活動や実習、そして教育発達学演習1・2を通じて学んだ研究方法の集大成として、教育発達学科の卒業研究が位置づけられている。算数教育に関して学生各自が課題を持ち、これを解決するための方策を考え、先行研究などの考察をもとに指導法や教材開発などの具体的な提案ができるようになることを目的とする。到達目標は、課題の解決にかかわる学習指導計画案や具体的な教具などの作成あるいは論文形式による成果を提出することである。</p>	
	卒業研究	<p>(13出井雄二)</p> <p>卒業研究は、大学4年間の教育課程の学習および学問研究の総括とも言えるものである。教育発達学科の卒業研究は、心理学、教育学、障害科学を三本柱とし、人文・社会・自然科学・芸術・体育など多岐の領域を統合しての教育発達学という視点を踏まえ、体育科教育学の領域で特に興味・関心を持つテーマを見つけ、先行研究・文献を購読し、課題を明確にする。そして、テーマを解決するための方法（実験や調査）や分析方法、さらには論文作成の方法について学習する。また、テーマに関する報告・討議などを行い、個人研究又はグループ研究として論文にまとめていく。</p>	
	卒業研究	<p>(14長谷川康男)</p> <p>卒業研究は、大学4年間の教育課程の学習および学問研究の総括とも言えるものである。学生一人一人が開発した生活科、もしくは社会科、総合的な学習の本質をとらえた、子どもが意欲的に取り組めるオリジナルな単元、テーマ、教材を作成し、その妥当性を分析して、その結果を卒業研究としてまとめていく。その作業を通して各自の問題意識を明確にし、教育学、心理学、障害科学を統合した教育発達学の実証的なデータの収集、分析、考察の方法も学んでいくものとする。</p>	